

と見え、「藩翰譜」にはヤハリ駿府で逝去したやうに書いてある。或は自刃したのであらうともいひ、或は食を断つて死んだのであらうともいふ。正史上の批判は孰れにあるか知らねど、演劇の脚色上からいふと「徳川太平記」と「山本日記」とに記すところが、尤も都合よく思はれたゆゑ、大體に於て之れを取入れ、幾多の想像を加へて現在の作のやうにした。岡山の陣所を茶臼山とし、廿八日に死んだのを八日の當日櫻門で血を吐いて死することにしたまで、甚しく作りかへた所もない。但し史乗の上では且元が心中はよくは分らぬ、岡山の陣所へ出頭して何を願つたか明かには分つてをらぬ、就中淀君の座所へ大砲を打かけたといふ事實に關する疑問が未解決の姿のまゝで残つて、忠か不忠かと疑はれてゐるのを、此の作と「桐一葉」とで描寫し解説して見やうといふのが作者の志してあつた。すなはち一面はシルレルがフレンヌタインの序詞中に述べたやうな意味もあつて、幾分かの倫理的インテレストもまじり、史論的感興も混じてゐたのであつた。

“In history's page reputation wavers,

As party hate or favour sway the scale;

Yet shall the poet's skill to sight display——

Yea, bring him nearer to your human heart.

For Art, which all embraces, all confines,

Subdues extremes, and brings them back to nature;

She looks at man, urged in the whirl of life;

And, lenient to his errors, she awards

His evil constellations half their blames.

trans. by J. Gower.

史論家的感興も混じてゐたといつても、それはあくまでも二の町の沙汰で、決してそれが爲に劇の本領を曲げやうとしたのではなかつた。本來小生の史劇に於ける態度は高尚優雅の名の底に繪巻物の活動に外ならぬものや時代風俗の物言ふ活人畫に類するものが歡ばれ、之れを活歴劇ともてはやし、甚しきに至つては蠟を噛むやうな、活動に乏しい、情熱皆無の、形似一點張の、而も人情からいへば却つて嘘としか思はれぬもの、一時行はれたのに反動したので、彼れを一種の典雅主義といふべくば、小生のは隠然近松とシエークスピアとに胚胎した一種の新ロマンチズムともいふべきものであつた。活歴主義の主張は、毎に風教に裨益すべしやう物せよ、即ち忠臣、孝子、義僕、英傑、節婦、貞女等を主人公とせよといふが一つ、成るべく史事實に忠なれ、詞も服装も道具立も成るべく其の時代に忠なれ、といふが二つ、事件も人物も脚色も餘りに荒唐無稽ならしむる勿れ、扮装、科介も成るべく自然に遠からざれといふ三つであつた。成るべくといふ語の解釋次第でこれらは必しも異存のあるまじきことなれど、實際の出來榮が甚だ妙でなかつたのみならず、おひく考證沙汰と風教論がむづかしくなつて肝腎の

劇詩の本領が留守になり、道具や衣裳の穿鑿が届く割合には時代精神や不易の人情はあがつたりの撫附仕事、よく出来たのさへも兎もすると平家や太平記を白て聴かされるやうな風のものであつたゆゑ活歴劇も一時行止りとなつてしまつた。小生はそれが甚だ氣に入らなかつたので、も少し火のある、熱のある、形似の上では不自然でもかまはぬ、情趣の上で自然な、いはゞ、も少し行儀のわるい、活動に富んだ、玄關前ばかりではない、寝間や臺所やを見せた、除所行仕立てない、不斷着姿のまゝ、成るべくは綻びたまゝ、破れたまゝ、といふやうな史劇がほしいと思つた。近松では餘り荒唐、默阿彌では餘り淺俗、形式の上はエリザベス劇程度で、性格を描寫したり因縁果報の理をほのめかしたりする手心は是非ともシェークスピアなどを理想としたものがほしいといふ大野心、随つて及ばぬ鯉の瀧登りと嘲けられるは承知で、何事も鵜の真似をする鳥で、史材の取捨鹽梅までもほゞ手本と同格にゆかうと思ひたち、活歴家とは全く別に、成るべく歴史の裏をくぐつて、舞臺面も成るべく不行儀な、我れを忘れた、氣違ひめいた、ごつた返した、てんやわんやなのを主とし、詞づかひも成るべく情を痛切に表するに足るやうなのを選び、情の激した瞬間には貴賤もなく賢愚もないといふ點に重きを置いて綴つたのが此作と「桐一葉」、「牧の方」。そのうち此の作は最後の筆だけに大ぶ反動當時の熱が下り、多少自分の思はくも變りかけてゐたゆゑ、幾らか甚しいところが減じてゐれど「牧の方」時代は自信が強かつたのだけに一段藥がきゝすぎてゐたと思ふ。

かやうな次第ゆゑ、すべて小生の史劇は相應に歴史を調べて書いたものではあれど強ちそれに拘ふといふとはない。例へば大野道軒の如き、正史には治長の弟に道見又は道犬とあつて父にはかやうな人物はない。尤も「慶元記」には「大野道軒、治長の叔父、始の名美濃守盲目なり」とあれど此の書も疑はしいことだらけ。然るを脚色上の都合より態と俗説のまゝに治長の父として用ひてゐいたなど、かやうなことは他にもある。又身分、年齢、服装、言語なども第二、第三のこととして等閑に附した故、歴史家や穿鑿家が見られたなら定めし快らず思はるゝとも多からう。

尙淀君の性格に關しては「太閤記」や「豊臣閥閥傳」などいふ俗書、小説に負ふ所もあれど、無論大部分は作者自らの想像で、所謂活歴流の考證や穿鑿に成つたものではなく、又敢てさういふ穿鑿をして見やうとも思はなかつたのである。尤もヒステリーだちの人物に作つて見やうといふ考へは「桐一葉」を著した折に三上博士を訪ひ、話の序に同君が示された曲直瀬玄朔の「醫學天正記」から多少のヒントを得たので、全然たる空想でもなかつたのであつたが、例の粗放から其の折それを寫しとりもせずおいたのを思ひだし、今度再び同君を煩して淀君に關する限りの寫しを手に入れることを得たゆゑ、そのまゝ左に掲げて、まだ見ぬ人々の參考に供する。玄朔は正親町天皇、後陽成天皇をも拜診したるらせ、幕府の侍醫となつては將軍秀忠に仕へ、寛永八年に齡八十歳で歿した當代の名國手、其の著いろくある中で件の「天正記」は天正年間の著名な人物の臨床治療の實記であるから歴史上一種の證文たるの價値が

あるとのこと。

一、秀頼公御母御年三 御氣鬱滯不食眩暈快氣湯木香飲也(十月二日、慶長?)

一内大臣秀頼公御母三十 氣鬱胸中痞塞而痛全不能食干時頭痛順氣湯回の 養胃湯痞滿

以上二條の外尚一つ左の如く記したのがあるは、或は前のと重複か、別か、分らぬと三上君は附記せられた。

一秀頼公母公三十 氣鬱心中痞塞疼全不食干時頭痛養胃湯木令守貴各一 莎宿木洞白薙朴婆各七 甘二

葉姜入十余貼之後同劑爲丸久服而痊(五月一日)

「孤城落月」の淀君との關係は兎も角もとして甚だ面白い證文だと思ふ。なほ淀君や且元の性格については「都新聞」に載せておいたから参照せられたい。(卅九年四月)

「孤城落月」について

「桐一葉」以來の経験で、作其物のあらも分り、俳優の藝風との調和もしつくりとはゆかぬといふことを

感じておましたから、はじめ此作をと申込のあつた時分、一たんは断らうとしたのですが、已に大阪で我當一座が演じた先例もあり、すゝめる友人もあり、十年前に書棄てたものでもあり、かたゞ承諾したのです。家康を秀忠に引直した事については賈阿彌、狂綺堂の兩君が主として芝翫を的に石火矢を放たれたが、これは寧ろ同儕へ氣の毒、無論あちらから申込んだことではあるが、又初手は小生も拒絶したことであつたが、後に考へ直して許してやつたので、何も先方がほしいまゝに小生の作を踏みにじつたのではない。許した理由はこんな作を彼れ是れとこだはるでもないといふだけの事、或は舊いた當座なら、作意がどうのかうのと氣煩らしいものを吐いたかも知れない。

右の次第ゆゑ、初手は作意についても一切口をさくまい積りであつたが、俳優連がいつになく大真面目らしいので、つい何時の間にか釣出され、尋に應じて役々の性根だけは説明しました。

今度は立者連は勿論、名代以下、下まはりの連中まで道具方、囃子かたまで、それ相應に氣を入れてしてゐるらしいのは感心、そのせいか色氣のない芝居が、ともかくもだれずに見てゐられたかと思ふ。役々の評は出来、不出来いろ／＼だが、これは専門家の諸評にゆづつて、小生は今度の経験で感じた丈の事を申さう。

初日前に、舞臺で、ともかくも道具を飾つて、たつた一日ながらも稽古をしたは、近ごろ珍らしく、よい例だと思ふ。しかし其稽古が衣裳、假髪は着けず、書拔もまだろ／＼覺えずにやるのゆる、呼吸が合

はず、歩武が揃はず、中には徒の素讀同様な手合も多かつたゆゑ、素人目には眞劍の手心が分りかね、随つて「これなら上等」と思つたのも、初日になつて見ると、大ぶ變つて、或は藝の調子が強かつたり、低かつたり、技の色彩が濃くなつたり、淡くなつたり、ほめたのが薬になつたり、毒になつたり、それといふのも畢竟は此方が素人ゆゑ、こちらとあちらと語の意味の解釋が別々、譬へば獨學の洋語で西洋人と應對するやうなもの、ともすると對話になり易かつた。て頭がちがふばかりでなく、言葉が通ぜぬといふのも、今の時代に於ける作者と役者との間の一大屏障だとさつた。

今の役者を分らぬといふ人もあれど、それは「分らぬ」といふ語の意味次第、小生は彼等は餘り分りが早過ぎると思ふ、説の片ばしを聴いて、もう已に合點したらしい様子故、安心してゐると、存外徹底してゐないのみか、思ひ違へてゐることもある。一字一句を會得せねば人物の性格は分らず、全篇を讀通さねば人物相互の關係は分らぬものといふとに氣がついてゐない、書抜以外の筋を初日までに心得てゐたもの、芝、猿、高等以外に何人あつたか覺束ないといふ程ゆゑ、自廻しに味ひが乏しく、仕草も活きない。況んや持役以外の性格などは、殆ど一人も研究してはゐないといふ有様。要するに恰憫過ぎて早呑込をするのが今の優人の通弊。しんみりと質問しない。衣裳、持物など（これは作者は不得手の事）の質問は細いが、肝心要の性格といふことは甚だ大まかに考へてゐる、此の點の注意が比較的綿密で一字一句の白廻しに意を注いだは猿之助であつて、芝翫も同じく苦心したらしいが、何分に

も調子が自由に變らぬ人ゆゑか、その割合に成功しなかつたを氣の毒に感じた。

白のめりはりにも、思入や科介にも寫實分子と舊歌舞伎分子とがまだどうも調和せぬのを今更のやうに感じた、例へば近來は強ひて歌舞伎ばなれ、義太夫ばなれをしやうと思つてか語意にはかまはず妙に早目に白を廻す俳優もある。これに目下東京、大阪の二市にわたつて凡そ二流あるかと思ふ、一は團洲式の活歴張に自分流をまじへたもの、他は團洲式をも親しくは知らぬらしき新式。前者は團洲の假聲に類して分別くさく、後者は壯士芝居の史劇めく嫌ひがある、例へば歌舞伎式に泣落すべきところをも泣上げる、そこは泣落したらといへば、つい又純乎たる義太夫式に逆戻りする氣味、思ふに、將來は作者も幾分か役者を兼ねて「こんな風に」と一々やつて見せるやうでなくては新作の成功は覺束ないと思ふ。素人が生中に指圖をすれば役者を迷はせるやうなものだと思つた。

詰るところ、新作、とりわけ時代物を演ずるは、古いものをしなれた舊俳優にとつては七分がたの不利である。新作には彼の歴代の名優が經營慘憺（苦心の解釋）の結果たるに外ならぬ「型」といふものもなければ、背景なり、鳴物なり、道具、衣裳、其他一切の選擇、段取も定まつてをらぬ、恰も新式の折衷畫や折衷音樂と同様、彼れは少くも百五六十年来の寂のついた器、これは昨今の發明品、專賣特許さへ得てをらぬ、當分の間儀式の場所へ持出しにくいのは其等の事である。

俳優は一種の美術家には相違なけれど、要するに第二級に位するもの、脚本は根幹、俳優は枝葉花實、仕

活すといふ點にこそ獨創力はあれ、その他は脚本次第、作意次第、作がわるくて性格に區別もなく、作意に深みもなからうものなら、いかな名優も工夫のしやうがない道理。これを思へば目下第一の急務は新作の奨励である。第二は新作に對する深切な研究と念入りの舞臺稽古の奨励であらう。新作はすくなくとも一箇月位の研究を積んでから公にして貰ひたいものだ。ワグネル物は純然たる樂劇ゆゑ只の芝居とは一様にはいへぬもの、「ツリスタン」であつたか、新に上場するとて、たしか優人が六十日ばかりも稽古して見て、どうも不結果ゆゑ中止し、其翌年改めて他所で稽古の上興行したことがあつたと記憶する。その六分の一の十日でも、或は一週間でもよい、試演してから公にしてもらひたい。いや初日前一兩度でもよい、しんみりと稽古を行ひ、あらゆる劇通諸氏を招き、其評を聴き、その指圖を乞ひ、参照し取捨した上で、更に一日道具を飾り、すべて本式通にして試演し、更に評を聴き、中二三日を置いてから公開して貰ひたい。目下我が劇場には舞臺主幹がないゆゑ、舞臺面全體の取締がない、調和がつかぬ、小生は劇通諸氏が斯道のために一大會を組織して顧問になられたらばと思ふ。若葉會雅劇會も結構だが、右やうな會がほしいではないか。さうでもせずば當分新作は出まいと思ふ。今のやうでは新作は多く不評ゆゑ、役者も尻込みし、作者もさしひかへ、いつまでたつても同じ居場所にどうくめぐりといふやうなことになるはせぬかと思ふ。

但しこれは將來の新作に對する理想をいふので、小生の作に對する今度の出來榮は、たつた一日の稽古の結果としてはむしろ上出來、深い研究なしであれほどにしてゐるのは、流石に黑人だけのことはあると思ふ。(三十九年四月)

明治座の「マーチャント、オフ、ヴェニス」

お需だから、又の興行の時の參考ともならうから、私は只今度の興行で或は間違つてゐやうかと思はれる廉々ばかりを申して見ませう。今度のを到底原作に照したり彼方の役者のしきたりなどに比べて是いの非いのと言ふのは無理であらうと思ふから。

先づ臺帳の方からいはうならば、流石に原作に目を通した春曙君が翻譯せられたゞけに廉々の意味には間違ひはないが、總體が譯といふよりは釋に近く、いはゞ間のびの姿です。二つには語尾が兎角同じ結びて止るゆゑ(例へば「がす」といふ語が行列するなど)言ひまはしにくく、自然とだれる氣味。原作者は徒の舞臺の穴ふさぎに挿入した句までが重々と譯され、それをまた俳優が思入澤山で一語々々念入に言ひまはしたゆゑ、舞臺に却て穴があき、ところ／＼原作者に對しては何だか氣の毒なやうな氣

がしました。チリツサが登場して手持不沙汰に見えたのが其の一例。ポオシャが洋書をひねくらねばならぬやうになつたなどが其の第二例である。總體に譯文は今一しめひきしめねば誰れが演ずるにしても演じにくからうと思ふ。

次には着附が氣に入らない。原作者在世のころのバルバッチ以來ドッグット、マックリン、クック、キーン(エドモンド)、マクリデイ、ブルック、ブリス親子、キーン(チャールズ)を経て今のア、ギングに至るまで多少シャイロックの服装には變遷はあつたものゝ、今度のゝやうなのは新發明過ぎて、チャリチの道化形ではないかと思はせるなどは罪が深い。畫を見たつてわかりさうなものだ。例外もあれど、先づシャイロックは多少長い鬚髯で、梳をふせた形の帽をかぶつて、長袖の長上被を被て、其の裾はほと／＼地に觸れ、杖をも携へてゐるのが通例。(總じて老人は長上被を被たものです。)今度のシャイロックは矢口の頓兵衛を鬼瓦銅八でゆかうといふハキチガへて、位取くらとぎがちがつてゐると思ふ。着附がわるいから、本來が貴族アラストクラツク的といふ自尊傲岸な根性が少しも見えない。シャイロックすらさうだから、其の他は大抵大間ちがひ。まだしもポオシャは似つこらしく見えてゐました。(尤も怪しげな帽子に花飾がついてゐるなどは呆れた。)アントニオ、バツサニオなどは粗末すぎて笑止千萬、これが當時の海上王ツエニスの一豪商、全世界を相手に貿易をする西洋三菱とは冗談にも受取れない。バツサニオとてもさうで、大富豪の姫君の戀婚となつた貴公子、幾千萬圓を風流驕奢に浪費した上流のつ、つ、こ

ろばしとは見えない。思ふにあの着附では數等立まさつた名優が演じても嘸しにくいことでありませう。

大道具は是非に及ばぬとしても、せめて小道具なりとも今少しどうか工夫が出来なかつたものか。とりわけ公爵やポオシャの前にするたデスクには愛相が盡きた。あんな粗末なものを用ふる位ならポールの紙で切ぬいて胡粉でも塗つたはうがどうかふさはしく出来たらうに、さて／＼智慧の餘つたことだぞ。シャイロックが衣囊から出す秤が東洋式の代物であるなどは餘りやつてつけすぎるてはないか。

さて藝の上では腹は間違ひながらもヤハリ川上が一番見られました。併しあくまでも下卑た高利貸のシャイロックで、タカ、半道化に演じたといふ言傳いしやうたのドッグット式のシャイロックで、彼の有名なマックリンや、エドモンドキーンや、ブリスや、今のア、ギングなどの型とは似ても似つかぬものでありませう。マックリンなどは眞に中興のシャイロックで、既にポーブも激賞して、是れこそは眞個沙翁が畫けるシャイロックと詠じた位。其の苦々しげな澁面の皺は恰まさて索をつくねたやうに見えて、見るからが執念深く殘忍氣であつたと書殘されてある。古くは舞鶴屋、今ならば先づ團藏式なので、其の他キーン、ア、ギングとも名高い成功、ふたりとも貫目とスゴミとを持たせた演じかたであつたと劇通の評言に見えてゐる。又は彼のエドギン、ブリスのシャイロック、これもまた大評判の當り役、就中

裁判廷の場のゆきかたはア、井ングともちがつて、面白いところがあつたらしい。それからイヤ見たとも無いくせに、受賣て比較沙汰を試みても詰らぬからよさう。あれだけにやつてのけた川上の度胸をほめたはうが當然でありませう。それから證文を引裂くところ、三木君もほめられたが、成程あそこは流石にようしてゐました。尤もブースの型ではあそこをポオシヤが證書を投げ與へるとそれを其の儘シャイロックが憤然としてふみにじり、見もかへらずして立去らうとするトタンにポオシヤが「俟て猶太人云々」と呼止めて、更に法律の明文によつて本裁判に移る——爰に始めてシャイロックが愕然として驚き且つ怖れるといふ段取であつたといふ。

よろめき／＼の引込はア、井ングの直傳のやうに傳聞したが、さる學者の劇評で見たところでは、ア、井ングのはまだ／＼ずつと念入て、グラシヤノに對しての思入なども色々趣の深いシグサがあつたやうに想像される。併しいづれも自身で見たのではないから、さうでないと言はれればそれまでのことです。

最も目立つて悪かつたのはアントニオです。シャイロックに對してこそ其の以前稍酷薄の振舞をもしたれ、身分はヴェニスの大富豪、任侠で廉直で飽くまで士君子と稱して耻かしからぬ剛毅の大商人、イハハ一段身分の高い松前屋五郎兵衛ともいふべき肌合をどう勘違へしてか、ひどくギスついた覺悟のわるい、女々しい人物にしてのけた藤澤の氣がわからぬ(尤も前幕の筋を知らぬのも原因でせうが)。

アントニオはとうに死を決してゐるので、法廷であのやうな見苦しい振舞をしやう筈ないと思ふ。セリフまはしなども徐かにあちついて悪びれぬ覺悟を示して貰ひたかつた。バツサニオも歴とした貴公子、もすこし溫和としたうちに義憤をも痛心の様をも見せて、譬へば骨組を武士にして皮肉はつ、つころばしの若旦那でいつてもらひたかつた。

ポオシヤのせりふまはしは翻譯者直傳の由、ところどころよかつた。兎も角もあの長ぜりふを暗記してスラ／＼と述べたは感心です。只あんまりスラ／＼すぎて仁慈の講釋などが白湯を飲むやうになつたは是非がない。しぐさのうちで面白からず思つたは机の上の洋書をひねくつたことです。此の場に臨んで民法第何條の取調でもあるまいに、型のあることか知らねど妙でない。これではどうやら海老茶式部の試験官と見立てられる姿になつた。シャイロックがアントニオを捉へて將に刃をあとんとする瞬間にキョト／＼と洋書を見てゐるなどは彌々あもしろくない。爰は間一髪といふところだ、尤もこれは川上のシャイロックがわるく爰で芝居をして、右から突かうか左から刺さうかといふやうな所謂綴帳式の奇怪なシグサに間を延ばしたので、やむを得ずテレかくしに本を見た譯でもあらうが。いづれにもせよシャイロックもシャイロック、ポオシヤもポオシヤと言へば、走りかゝつてはしたなくシャイロックを押のけようと騒ぐバツサニオもバツサニオ、刺股のやうなもので強ひてシャイロックを押隔てる役人も役人、ヴェニスの法廷は大ぶ威令の行はれぬ亂雑なものであつたと見えた。

要するに、いづれも人物の言語舉動が野卑下劣で、其の事、其の人、其の趣にはまりかねました。また申すことは、いくらもあるが、ほのかに聞けば、さる方面のさる有志家連が川上の向うを張つてか遠からぬうちに同じく此の劇を演じ試みやうかといふ目論見があると承つたから、或は改めて卑見を述べる機會があらうも圖りがたいと思ふから、今度はマアこんなこと御免を蒙つておさませう。(三十四年七月)

明治座の「オセロ」に就いて

いかに物がシェークスピアだからとて、明治座のこんどの劇を直に原作に引きあて、批評したり、英米佛獨のシェークスピア役者の慣例や型に照らしあはせての評判三昧は、例へば昨今の新體詩などを評するにミルトンやシルレルを引合に出す格で餘り大げふかと思ふ。しかし折角のおたづねを無下にするでもないから、ホンのおもひ浮んだことだけ言つて見ませう。

六七年以前までは早稻田の學校でシェークスピアの作を講じてゐましたから、大ぶ逸話やら傳説や

ら、つまらぬ事まで記してゐましたつけが、今は大概忘れてしまひました。

自體今度のは時代物を世話も世話、生世話に直した格ゆゑ、頭て原作の雄大な質は消えてしまつた、是れも是非がないが、それが爲あぶなくコメディーに流れさうになつてゐる。原作のまゝてやつてすら兎角優人の技倆が足らぬと、悪落になりかねないのが此の作のむつかしい所で、名優キーンでもマクリデーでも彼の佛のフェシテルでも十分の成効ではなかつた、イヤむしろフェシテルの如きは失敗、マクリデーの如きも凡々、キーンだけが八分の成効、とは古劇通の書残した所に明かである。ブリス(子)もアービングも十二分ではなかつたらしい。「ハムレット」が「忠臣藏」なら「オセロ」は近松の世話物であらうか、ハムレットは下手がやつても不思議に見物の同情を引くが、オセロは餘ほどの腕さゝがやつても嫉妬煩悶の邊があぶなく悪落に流れるか、さなくも同感を得にくいらしい、そのむづかしい奴に眞先に取つてかゝつた川上の意氣は例の遠州灘乗切式とでもいはうか。

オセロの演じにくいに比べれば、イヤゴはむづかしいながらも儲かる所の多い役です。キーンもブリス(親)も大分當てたらしい。其の性格をいふと、イヤゴは廿世紀に所謂唯物主義者で、神を信ぜぬは勿論、道義の命令を芋の尾ほどにも思つてゐない、言はゞ一種の本能満足論者で、實行者で、近時流行のニイチエヤニズムの躬賤者だが、ニイチエ流とちがふ所は、たゞ口先ばかりでないのと偽飾を行ふとである。即ち其の親友に對しての外は必しも此の主義を公言しない、或程度までは公言し、或程度まで

は偽飾する。尠くともオセロだけに對しては道義を尊崇するやうな顔附をしてゐる。

イヤゴの信ずる所によると、人間の最も重んずべきは意志である、ニイチェの所謂、イブセンの所謂意志力です。次には智慧だ、天命も道德もあつたものでない、智と意によつて運命を作りだすのが人間の本分、随つて最も賤しむべき情に溺ることだ、可愛いもの、氣の毒だのと女々しい情慾の奴となるのが人間の大弱點云々といふ此の邊の議論は彼のノルダグが『墮落論』の結論に半諷刺氣味をまじへて論じてゐる所をつくりて、まことに面白い。いつの間にか話が横へ外れはじめたが、ツマリ此の人物は決して並の悪漢ではない、女に惚れたり、人をそねんだり、錢をほしがつたり、虚榮を求めたり、その邊の動機で悪事をなす輩とは格ちがひで、言はゞ同胞を弄び、悉く之れを自身が惡戯の餌にするのが面白いといふやうな氣で悪事を働くのかとも見える。即ち人面の惡魔で、さるべき動機がなくても悪事をしかねぬ悪漢、外から見ると何の爲めに悪事を爲すか、解しがたい。ゲーテの「ファウスト」の惡魔は或は此れを標本にしたのではあるまいか。ゲーテだから決して其儘には用ひない、無論奪胎換骨した上に精げが掛けてはあがあるが。斯んな悪漢はシェークスピアの前にも後にも無いので、之れを「理想的の悪漢」と評したのももある。さて此のイヤゴは氣質の上から頗る平均が取れて居る人物、即ち多血質で、神經質で、膽汁質で、當意即妙の頓才も廻れば、辯舌もよく、滑稽もあり、遠く慮り、深く考へる事も出来れば果斷敢行もなし得る、換言すれば直覺的にも、分析的にも、腦が働く、常識にも富み

膽力も据わつて居る、詩人的で、哲學者的で、又實際家的であるが、高田のは神經質的膽汁質的で、(高田の悪漢はいつでも此型一點張だ)多智圓轉で無く、原作の如く洒脱快活で無い。原作では、カシオに酒を飲ます處で、流行唄を歌ふ、高田は只樸直を裝つて居る悪漢であるが原作の意とはちがふ。極洒脱磊落な軍人肌で、高田の様に、粘々では無い、滑稽突梯口を衝いて出づといふ鹽梅で、言ふ言葉に毒はあれど腹には毒がなさうなと思はせるがイヤゴの技倆、即ち言動共に磊落だから皆が欺されるのである。ツケ／＼と嘲弄し、ツケ／＼と口外し、遠慮斟酌をせぬげに見せつけてゐるのがイヤゴの慣手段、例へば彼れは女は男の玩弄だ、と明言して居るが、其れをデスデモナの前でも構はずに言ふ、誰の前でも磊落な言動を變へない。今度の前には除いてゐるが彼のオセロの上陸するを待つ間に、デスデモナを慰めがてらに女の淑慝を述立てる所などを見るとこの理がわかる、イヤゴが快活洒脱磊落といふことは古今の名優の型が證明してゐる。尤も優人／＼によつて少しづつ濃淡のあることは勿論だが、之を要するに外題は「オセロ」と言つても、イヤゴが主なるワキで、此の劇からイヤゴを除き去るは、猶ほ「平家物語」から重盛を除くやうなものです。

ブラバンシヨも少し違ふ。以太利は熱い國で、日本で言へば薩摩ッ坊だ、老人ではあるが直ぐに怒るといふ所が無くては成らぬ。オセロにあつて喧嘩になる場も、原作ではブラバンシヨが家來を連れて追手に出て途中でオセロの一連に遇ふ、自分が直ぐに劍を抜いて決闘を望むのでは無い、家來が先

づ闘ふ。(これにも仔細があることです)。而してイヤゴはオセロがたて、態とロドリゴに斬つて蒐るなどいふゴマカシがある。さて兩方斬合の途端、オセロが割つて入つて大喝する、川上のやうに相手の手を制へるのでは無い、だから人物が大きく見える、而して此處では一喝すれば千軍懾れ伏すといふ程の勇將が、後にはたつた一婦人の爲めに、小くなつて煩悶し歎き騒ぐといふ、此の前後の對照が、尤も微妙なのだと思ふ。

其れから、デスデモナの出が引立たぬ。議員列座で殆ど裁判庭的の大事の場所てオセロとブラバンシローの對決になる、水掛論で曲直明かならず、而してオセロは絶対絶命で、論より證人、デスデモナを呼んで貰ひたいといふ。自分が訥辯で、巧く言開けないから、デスデモナを呼ぶので、呼びに行つて居る跡で物語になる、物語が了る途端に姫が場に登る。總理大臣は原作で公爵だが、今度の伊藤侯の通人でない、むしろ嚴格に言渡す。オセロが絶対絶命になると思ふから、デスデモナは常ならば斯んな席へ出れば羞ぢ怖れて口ごもるべきだが、今は情人の一大事、羞も怖れも斟酌する暇がないので雄辯になる、即ち情の雄辯——貞奴のは分別がありすぎる。

オセロの容貌に關しては黒奴だといふ舊來の説と只アフリカ未開族の血統即ちモーリタニヤの國人たるに過ぎぬので、所謂クロンボではないから、今度の川上位の赤ぐるい顔色でよろしいといふ説と二派ある。シェークスピアはムーアとニグロの區別を明に知つてゐなかつたかも知れず、又其の當時の趣

向は多分ニグロでやる點にあつたらしいが、何もこんなことまで原作に拘泥するに及ばぬといふので、キーンは英斷で赤ぐるい式をはじめ、コルリツヂは之れを賛成したが、今尙議論は一定せぬ。尤もロドリゴなどの白の内に色が黒いとか、唇が厚いとかいふ事が言はせてあるが、其れは罵詈雑言の句で、明らかに黒奴と言つてある所はない。ムトル人中の王統、王統と言つて大きい酋長ぐらゐるかも知れぬが、兎に角、一族の長たる血統を承けて、賤い人物ではない。先輩の所謂開化したる蠻人(シビライズド、バアバリヤン)即ち威嚴のある、確に團十郎張の怒れば獅子の如く殘忍な事をなしかねぬが、併し非常に氣高い純潔な心を有つて、人の讒言などを輕々しく信するやうな男では無い、が、イヤゴの理想的悪漢の辯舌でツイおとし入れられるので、だから嫉妬の悲劇では無い、全く奸計の犠牲となつたので、何んな人でも原作の如き場合にはオセロと同じき運命を取るより他は無いといふのが眼目であらう。それを焼餅深い男と思つて演ては間違ふ。平生は只ノタリノとしてむしろ柔和に見える大蛇が、一旦獵夫の毒箭にかゝつて苦痛の骨に徹るをちばえはじむるに至つて七頭八倒の惱亂をはじめ、其のありさまなどに思ひあはせて演じて當然であらうと思ふ。

其れから、デスデモナが夫婦別ありすぎて行儀正しい、といふよりは斟酌分別がありすぎて、冷かな明治式。つまり元が野合だから、ことに此の女はシェークスピアが女性中でも情的と特稱される組の女だから、もつと／＼アドケなく多少「よくつてよ式」だわねえ式を加味しなくてはいけぬ。要する

に言動に無邪氣が見えねばならぬ。前の議席でオセロを辯護した雄辯は全く情がさせた辯舌で、其の後は狐がもちた只の嬢さまといふ所が身上だのに、貞奴はあんまりサラ／＼として油氣がうすい。ツマリもつと甘へる所が無くてはならないのに、今度のは男尊女卑の舊日本式で、あの關係鹽梅では姦通と證があがつた以上は重ねておいて眞二つの舊制裁を行はねば筋法があふまい、尠くとも打殺しても爲なければ成らないやうに見える。

カツシオはまあ彼んなものでせう、扮粧や詞にはいかゞはしい所も少々あるが。

エミリヤも分別がつきすぎて居る。イヤゴの白に「汝は、外へ出れば繪に描いたやう、客の前へ行けば鈴のやうな聲をする、併し臺所では野猫だ、荒廻る、家政をやらせると懶け者が、床へ入つてはじゃ／＼馬だ云々」無論これは悪口だが、どちらかといへば餘り機轉のきく女ではない。今度は役がよくなつてゐる。九女八は利口過ぎて、ハンケチを渡しさうに無い。

ロドリゴは服部式のハイカラではないが、あくまでもイヤゴの餌になる好色の、利發でない男で、併しデスデモナを慕ふ心は全く切なので、悪人ではない。情慾の奴となつたために、イヤゴにあざむかれ、次第に罪惡を犯さんとするに至るのである。但し今度之れを翻案して服部式にしたのはむしろ作者役者の働き、咎むるには及ばないと思ふ。

私は末の幕三場ばかり残して歸つたから、お話は此の邊で切上げます。(三十六年三月)

西洋の八人藝

西洋に希臘、羅馬の昔から腹語術(腹の中で物を言ふ術)といつて、少しも唇を動かさないうて種々の假聲を使ふ法がある、恐らく今も尙あちこちで行はれてゐることでありませう。此の法で物を言ふと、其の聲が其の人の口から出るとは思はれず、先づ其の人の腹の底から出るとかやうに聞える。或時は尙く、或時は遠く、或は屋根裏からのやうに、或は穴倉の底からのやうに、或は手に持つてゐる個人が口をきいたかのやう、或は外國語を使ふとか、歌でも歌ふとかすれば、平生は其の心得の更に無い傍に立つてゐる男又は女の口から出るとかやうに聞える。未開時代には此の法を行ふものを、或は魔術使ひと思ひ、或は何等かの精靈やうのものに憑られてゐるものと信じ、深く怖れ、羅馬人などは之れを「腹占」と名づけて未來の吉凶を卜する一法としたといふ。希臘時代にやかましかつた神託といふものも、多くは神官が此の法を行つて神の告らしくもてなしたものであらうと思ふ。普通精靈が憑いたと稱する場合の「腹語」は頗る間延びな低い調子で呻吟く様な聲で言ふものらしい。それが老練になると何

様な聲でも自由自在に出し得るのである。其の秘訣については多分胃腑をどうかいふ鹽梅に作用すのだからといふ俗説もあつたが、今はそれは單に深く長く息を吸つておいて即ち十分に息を貯へておいて、さて巧みに咽喉と上顎とを作用かせて徐ろに物を言ふに外ならぬもので、別段不思議な術があるではなく、全く熟練の結果だといふことが分つた。老練な腹語師は一時に多數の人の假聲を使ひわける。無論聴衆の面前に立つてゐて行ふのであるから(幸堂君の語に因んで言ふと)登山式でなくて詩鶴齋式である。

「八犬傳」に匹田基藤の父の某といふ剛盜の首領が、多年兇惡無慚の振舞をなし、孕婦の肚を裂いて肚の子を取り出し之れを食ふなどいふ大惡業をした報いで、或時都見物に出てたる折、年來附き纏うてゐた怨靈が都大路の真中で彼れが肚の裏から聲を發し、高聲に其の舊惡を罵り立てたので、忽ち巡邏の役人に見咎められ、捕へられて誅に伏すといふ一段がある。思ふに、あれもまた一種の腹語であらう。病理學上の心理から見て此のたぐひのことがあり得るものらしい。所謂幻想作用で、平生から神経にかけてゐると、ふと其の物に憑られたやうに感じ、自分では言ふまい／＼と思つてゐることを却つて我知らず口にして驚き訝ることがある、即ち自分では知らないで腹語術を行ふので、そして自分迄が他人の聲を聞いたかのやうに思ふのである。さういふ場合には怨靈などに憑かれたと思ふのも道理である。多分は馬琴は何かそのたぐひの實例を讀んだか聞いたかしてゐて、それであそこへ利用した

ものであらう。「八犬傳」以外の小説の隨筆かて別に讀んだことがあつたやうに思ふ。

この腹語術さへ出來たならば器用な人ならば所謂八人藝位は何でもないであらう、小生の讀んだ書で比較的此の術のことがくはしく書いてあつたのは英國のライシヤム座の歴史。ライシヤム座といふのは例のアーピングが沙翁劇をやつてから有名な座で、先づ守田勘彌時代の新當座に比すべきもの。しかし何分にも自分で直接に聴いたのではないのみか、詳いといつても徒の大要が書いてあるばかりのを取次ぐのだから、到底面白くはないものだが、約束だから雑と話しませう。

それは、今から八九十年も前のこと、ライシヤム座がまだ大寄座同様であつた時分、チャールス、マシウスといふ男が出勤して、兎に角英國では空前ともいふべき奇な藝を演じた。それが恰も我國で謂ふ落語兼帯の八人藝、大層な人氣で、愛蘭士アイランドの詩人、それ、バイロンの信友のムーアも、米國の文人ワシントン、アーキングなども喜んで見物したといふこと。番數も多く藝道は種々雑多なれど、最も喝采を博したのは「乗合馬車」といふのと「腹語術の實驗」とも名づくべきものであつた。

幕が開くと舞臺面は應接の間で、道具といつては小さい卓子が一脚あるばかり、萌黄色の卓子掛が掛けであつて、其の左右の端にランプが一基づつ、それから椅子が一脚。こゝへ普通の夜會へでも出掛けたといふやうな服装で當の演藝者たるチャールス、マシウスが登場し、先づ普通の挨拶をする、種々滑稽澤山の演説をする。やがてがたくり馬車の話に移つて、同じく滑稽的に乗物の種類にいろ／＼ある

ことをいひ、すべて此の種の乗物はぬらくらものを運搬するための道具で毛蟲や芋蟲や蝸牛など、餘り離れた中でもないなどいふ、がたくり馬車の諷刺かとも思はれる長枕があつて、さて「或時吾等乗合馬車に乗込んで云々の地へ参つたところ」といふ話になり、乗合の男女の事に移り、其の人々の身分、職業、人柄特質等を批評し、説明し、いよく本藝にはいるのであつたが、登山や壽鶴齋とは違つて人物中に女性も一人二人はまじつてゐる。併しやつぱり演りにくいと思へて若い女はいれてない。

さて此の乗合中の立者は、第一が氣むづかしい批評家、第二が饒舌の佛蘭西人、第三が舌たらずのやうな口のさかたをする老女、これがまた暫くも黙つてはをられぬといふ冗言すきで更に要領を得ぬ噺話をしつかりなしにしゃべる。さてだん／＼馬車が進むにつれて佛蘭西人は彌／＼敵手ほしやで、氣むづかしやの批評家へ話をしかけるが、これがまた話嫌ひで、中々敵手にならぬのを、いろ／＼にして誘ひ出し、三人の話がおひ／＼興に入りかける途端、俄に馬車に破損所が出来てハイゲートといふ所で暫時停車といふことになる。(此の邊は八人藝といふよりも寧ろ我が仕方話式で話したものかとも思はれる)。こゝで屠丁が一枚加はる。この男が屠丁の癖に文學好で、とりわけ英國の歴史が得意で、過去の大事件や英雄豪傑の逸話などを自慢さうにならべたるところ、それが悉く大まちがひで、秀吉と義経とが同時代になつたり、六代御前と靜御前とが姉妹になつたり間ちがひだらけ。そのうちに破損所の修繕が済む。馬車はまた動き出す。佛蘭西人と批評家との間に演劇論や脚本の評がはじまる。

佛蘭西人は脚本は是非有韻有平仄の文章即ち韻文でなうてはならぬもの、英國の韻文にも折々はすばらしいのがあると、よせばよいに知つたかぶりに古い歌を朗吟する、ところがそれがまた悉く間ちがひだらけといふやうな滑稽。大がいに此のゐる、無論此の間に三人四人の談話や批評が錯綜になるのであるらしい。此の邊も八人藝といふよりは我が落語式に近くはなかつたかと思ふ。

此の／＼さが第一部で、それが済むと間に唱歌か何かあつて、第二部に移ると、腹語術がはじまる。これが全くの八人藝だ。幕が開くとテーブルがあり寢臺があつて、そこに一人の紳士が寝てゐる。ろ。(無論、誰れもゐないので)。カルテンか何かで内の様子も見えねば臥てゐる人の姿も見えない。その人は久しく憂鬱病にかゝつて今にも死ぬやうに思つてゐるので、折々噺話をいふとなどもあるといふ仕組、こゝへマシウスが此の紳士に使はれる侍僕に扮して登場すると、何處ともなく幼児の聲が聞えるので、あちこちを見廻し、とゞテーブルの下の箱から大きな個人の童子の服装をさせたのを取り出し、腹を立つた思入で「何で貴様はこんなとこへ這入つてゐやあがるのだ」といふと、すぐに童子の聲で如何にも其の個人の口から出たやうな聲で「だつてわたい、をぢさんが八人藝をするのが見たかつたら箱へはいつてゐたの」(箱とは猶櫛といふが如し、見物席のこと也)といふのが滑稽の序開で、此の子供とマシウスとの間に道外問答がつゞく、そのうちに病人が目を醒し、床の中から苦しうな聲で「物がたべたい、早う食事にしてくれる」とせきたてる。そこへ女中頭のスロップ、いふ女、執事のゴオク

といふ男などが、ごたくと這入つて来て、都合五人になり、怒るやら呻吟くやら笑ふやらといふ段取らしい、とマシウスが右の四人とかはるゝ組合つて歌を唱ふのが幕。

尙此外に裁判所に於ける滑稽、冢のことが原て訴訟になり、原告、被告、判事、検事、辯護人などが出て、これも滑稽百出、それから新聞紙の諷刺(これは一人演説らしい)などいろゝあつて、最後に蘇格蘭土スコットランドの老女が何の意味もなき、たはいもなき長話ながはなしをする一段あり、それと同時にありあふシヨールと帽子をとりて戴くと忽然として、こゝに示すが如き老女となるが一段落、即ち百面相も兼帯。また此の外にもいろゝあれど、要するにマシウスは口舌の上の八人藝ばかりでなく假装も頗る巧みであつたと見え其の後一千八百二十二年に演じた時には八人藝を扮装の上でも演じてゐる、そのあらまはしは前の書で分る、いづれもマシウスが扮してゐるのである。此のマシウスの妻及び一子ジェームス、マシウスは一時多少の名聲を博した俳優であつた。(三十九年七月間は省く)

故緑雨君を追懐す

明治はまだやつと三十七年にしかなりませんが、文學上の歴てはもう既に三度ほど期を改めてゐるかと思はれるのですが、故齋藤緑雨君は其の恰も第一期、即ち同君が江東みどりなつと名宣つてゐた時分、今からほど二十年程も前かたからの知合で、先づは私が最も長く親しく交際つた文學上の友人の一人だといつて差間ありません。君は作家、修辭家、批評家の三資格を具へて、而も多少著く自家の特質を發揮し得た人で、明治文學第一期から第二期へかけての名物男です。さて其の本領は(尤も、伶俐な、機敏な人であつたから、晩年は多少新しい感想をも取入れて、筆つきもちひゝ新しみを加へて来たやうであつたが、尙其の本領は)どちらかといへば文化文政脈で、英佛でいふ十八世紀的で、一言以て蔽へば江戸式作家の殿しんがの一人といふべきでありました。それは君が明かに又は暗に師事し若しくは私淑してゐた人や著述を調べたならすぐに分らうと思ひます。即ち君をして狭斜通、會席通、浮世通たらしむる端を開いたのは小西義敬一流の男女の粹客で、濃艶なる修辭家たらしめたのは君が愛讀の詩集、歌集、俗謠、淨瑠璃のたぐひ、又君をして諷刺家、嘲罵家、秀句家たらしむる礎を築いたのは假名垣魯文、其角堂永機、南新一、三馬、一九、京傳(?)などであつたらうと思はれます。

明治十七八年から二十年頃までの君は、曲亭式の雅俗折衷全盛時代のこととして、四六駢儷張大信仰で、詩句、歌詞、俳語なひませの、それはゝ濃厚な、七五調まがひの、當時の繪入新聞には先づ目新しい、筋は甚だ單純な文は思ひ切つて華やかな、短人情話などを綴つて居たものであつたが、「讀賣新聞」など

を舞臺にして正直太夫と名宣つた前後から(二十三年頃)突然一變して諷刺家の本事を現し、一種特色ある批評家となり、前半生を知らぬ人達には、或は怖れられ、或は買ひかぶられ、或は甚しく憎まれ種々の意味に於て誤解されたり、もてはやされたりしてゐました。併し本來を知つて居るものから見れば、何も驚くべき變化があつたのではないので、只批評家、諷刺家といふ新資格を發揮したのと、その資格に必要な一文體を工夫しだしたといふまでであつた。

前にも申した通り、君の文士としての資格は三つあるので、其の一は作家です、其の最傑作は「かくれんぼ」で、其の最も苦心して筆を着け且つ頗る綴り悩んだ作として其の最も成熟した感想と筆致とが現れてゐるのが「門三味線」、夫から比較的に樂に書いて最も當世向に纏つてゐるのが、「油地獄」、其の他はとりたてて言ふ程でない。蓋し作家としては、文化文政式の稗史流に廣く淺くか、然らざれば人物を若旦那、雛妓、小娘等に限り、舞臺を江戸の町家、東京の狭斜と狭く限つて、細かく且つ稍々深く寫すか、此の二様に過ぎなかつたのです。されば其の傑作三種は詰る所同脈、同工で、随つて「かくれんぼ」の簡淨の妙は他の二作を壓して餘りあるやうに思ひます。さて第二の資格は修辭家(文章家)です、其の特質は濃艶、精緻、纖巧、時としては絢爛から脱化した清麗、いはゞ、艶消し、薰しの趣味に似たる瀟洒、華文はどこなく俗曲俗謡の風韻を傳へ、論文、批評文は諷諧に長じて才氣の溢るゝばかりなるにも係らず、兎もすれば貴族的即ち殿様式、若旦那ぶりの尊大な影を見せてゐました。それから第三の

資格は批評家、諷刺家、嘲罵家で、これが後には殆ど本領のやうになつたのですが、此の側面の代表は第一に「小説評註」、これは其當時私が激賞し、君も大得意であつたもので、彼のスヰフト、ボープが合作の「詩の下手になる法」といふのにそつくり其の儘比較すべき珍篇、早晚其の拾遺のやうなものを作つて、それへは鷗外君と故思軒君と私とを綴り入れる筈だといつてゐたのに、とうとう例の吹聴だけで立消えてしまつたは甚だ残念であつたと思ひます。つゞいては新聞紙に載つた諷刺嘲罵の文乃至「覺帳」「仕入帳」等一切の雜筆、これらのうちには苛辣だの冷刻だのと世間の批評家からいはれた分もありますが、大體は寧ろ奇警とか穿細とか評したはうが當然でせう。大ぶ文句に苦勞した痕が見えるだけに、實感を離れて讀むと、存外文氣は峻烈でないやうに思ひます。此のあたりの特徴がすべて英のボープによく似てゐます。これは私が同君に面と向つて幾たびもいつたことで、今更いふも何ですが、例へば、其の千鍊萬鍛の鹽梅から、文字の濃艶纖麗なところから、諷刺嘲罵に長じてゐた呼吸から、議論の常識的な點から、其の蒲柳質で多病であつたことから、また其の性質までが、よう似通つてゐたことだと今でも尙思ひます。只ボープよりもはるかに不遇であつた爲に病も重り、彼れよりも弱かつた意志が更に一段弱くなり、彼れの如く一代の詩王と崇められる盛譽もなく、剩へ不幸短命で果てられた一生を思ひやれば、甚だ氣の毒なこと、存じます。

爲人は、決して君の書いた嘲罵文などのみを讀んで輕卒に想像してゐる人々が思ふやうではなかつた

本来は至極内氣な、義理堅い、臆病といつてよいほどに用心深く氣の小さい、併しながら頗る勝氣な、随つて阿諛追従は大嫌い、すぐ糾るやうな虚言などは決して吐かぬ、自尊心のある、見識高い、折々は人に憎まれる程高慢のほのめく、親分、兄分になることを好く、狷介な、選り好みの何につけてもむづかしい、さりとして面と向つては極々口数の寡い、優しい、おとなしい、ひよろ／＼と痩せた、色の白い、目元に愛嬌のある、白い齒をちらと出して冷かに笑ふ口元に忘れぬ特質ある、先づは上品な江戸式の若旦那とした。詩人肌を狂熱とか空想的とか没常識とか不羈奔放とかいふと一つにして見ることになる、君は詩人的ではなかつた、即ち物事に凝りはしても逆上せて氣ちがひのやうに熱するやうなことは決してなかつたらしい。他人の疵瑾はもとよりのこと、自分の疵瑾さへもよく心得てゐるほどの十分の常識があつて、江戸式通人を理想とする所から生ずる洒脱主義を奉じ、都會自慢の田舎嫌ひで、そしてどちらかといへば樂天主義であつた。こゝらも彼の英佛の十八世紀かたぎをつくりて、先づは常識に立脚して自然や人生を觀察した人といつてよいでせう。シニクではなかつたが、唯物主義的であつたことはほゞたしかです。「金があれば樂天、なくなれば厭世です」などは諷刺半分折々同君の口から漏れた。戀愛神聖論などは君が得意の諷嘲的でした。嘗て「色百種」といふ一篇を作つて「五人女」の向うを張る積りといふ話の序に「當世風にいやあ戀百種でせうけれども、ツマリ同じことですからねえ、わざとむきだしに」といつて、例の冷かに白い齒をちらと見せて、殆ど聲を出さずに笑つた君の面影

は今も尙見るやうに思ひます。新詩なども大ぶ嫌ひでした。これは俗曲通であつたゞけに一しほくすぐつたいやうに感じたのでありませう。

本郷眞砂町に私が住んでゐました時以來、こちらから訪ねたことは十餘年間に前後たかゞ二三度以上はなかつたのでしたが、先方は毎月大概一度位は必ず訪ねて見えて、來れば短くて半日、長ければ殆ど一日、低聲での話の題目は大抵は文壇の事、疵瑾探しめくことがマア多かつたが、さりとして決して口汚く人を誹るといふ風ではなく、むしろ慷慨乃至歎息の口吻で、甚だ靜かに、柔かに、言葉ずくなに、當人が傍聴してゐても恐らく一言も無からうやうな、適切な、道理に合つた批評をするのが習ひでした。尤も折々は、例の白い齒をちらと見せて、聲を出さずに蒸り笑ひをしながらの諷嘲の秀句、文章其のままの警句などもまじりましたつけが。此の種の來訪はツイ六七年前まではつゞいたのでしたが、いつとなく疎遠になつて、小田原からこちらへ戻られたといふことを聞いたばかり、どこと居所さへも知れずに居ましたうち此度の凶報、まことに氣の毒な、残念などをしました。お尋ねによつていろいろ過去を思ひ出せば今昔の感に堪へない。

同君が二度目二六社へはいられた時分、何か書いてくれとの事であつて、紋切形の祝詞でもないから、或は悪口でもよい、何か書いてくれといふ頼みに任せ、書簡體に綴つてやつたのが「文學其折々」の七八ページに載せてありますから、只今お話申したことゝ對照して見て下さい、さうしたなら私の眼に映

じた同君だけはほゞ盡きようと思ひます。

拜啓仕候、手紙ばかりは肩の張らぬ書きものと存じ居り候ひしに、うたてや近頃は内證の一通もだしぬけに生捕られて、とんだあかるみの曝しものとなる慣はし、其の流行の上をゆきて、新聞紙の埋草にといふ断つきの返書の催促、さてくけうとい御注文かな、恐縮とは一定かういふ句取の次ぎへ入る文言と發明はしても、廻らぬ筆のあとやささが案じられ、成らうことならといふ名聞も混り磨る墨は雲を流せども、龍はさてあき蚯蚓がさも紙にはのぼらず、何故といひたまへ、度々噂ばかりにだまされし疥の蟲が今更の出陣をすなほにも目てたいと申すべさか、さりとしてポーブ、スヰフトとの比較も二度の勤はさせたくなし、善馬劍といふ表徳もことふりたりといふ文句と共にことふり、結句言ふことのないは久しい知交の君なればなり、但しいふことのないとは申分がないのと義にはあらず、君ほど申分のある人はなし、苦情屋といへば申分そつちもちなれど、皮肉な男いふときは申分こつちもち也、いづれにしても申分の本山、狷介といふ熟字は君の爲に作られしかと思ふほど、さつても七むづかしい人かな、誰れやらが君を文壇の三猿とはよい見立、三つ子の魂百まで、あはれ、僕がはじめて君を知りしころは、さてさて氣むづかしいお嬢さまの、あゝて無い斯うでもないくゝの好嫌ひやかましく、他人の疵見通しの其の身じまひも念入にて、文章の艶ほいこと舞子の如く、げにはじめは處女の如しといふ本文通りなりしに、いつの間にやらずんと垢ぬけした

洗ひ髪、さつくばらんの大姉え、廣い世間におれの氣に入つた野郎ひとりばちもないといふ權幕おそろしく、口の悪いこと此の上なかりしが、色氣はなほしたるばかりと見るく廣袖をひきぬいた善馬劍、かんぬきさしの町奴、強きを挫き弱きをすくふ一通俠となりひら文治、と語呂の都合にていへば優美に聞ゆれど、高慢と我儘の華族臭さは、さしづめ松平長七郎の格也、されば馬子觸るれば馬子を噛む、譬へば人の下につくことびやくらい厭だと額に銘打たるじやく馬にひとしく、乗せるが職分でありながらまがきても小粟でもてんぐりかへすを專賣の身勝手作者、所詮文を賣つて世を渡ることの出来ぬ皮肉男、若し此のまゝて青山天王寺に埋葬となれば、見識と狹量等分の男なりしといふ墓碑銘が至當なるべし、さてこそ這入つたといふや否や飛びだし、書くといふかと思へば中止し、面白さうな題目と面白さうな趣向ばかりちらつかせて、つひぞ正體を見せぬ人じらし、此の變幻出沒を龍と見立つれば『二六』は差結め雲の如し、今此の雲を得てあらためて正太夫をあらはし、尙何のなす所なくば、君が狷介はけんくわかひと下落し、君が高慢はほんのわれぼめの高慢たるに止まらん、あはれ此んな返事を得るは、日ごろ悪口の因果せうことないと思ひたまへ。

故小泉八雲氏の著作につきて

私が故小泉八雲氏と相知るに至つたは、つい昨今といふさへもいかと思ふほど、ほんの浅い〜知合であるから、深く愛敬してゐた先輩であるにも係らず、其の著書も二十種ほどあるうちで、僅か八九種しか知らず、其の傳さへもやつと此頃承知したといふ次第ゆゑ、さしあたつて批評らしいことは申しかねる。けふは、只ほんの、其の以前同氏の著書を読んだ時分の感じだけを述べませう。おひ／＼讀殘しの分をも讀む積りですから、或は將來の評は今日申す所と多少異なるかも知れません。

我が特殊なる風俗の紹介者、解釋者、回護者としての同氏の功勞は、今更改めて言ふまでもあるまい。餘りに温い同情を以て、ひたすら我が風俗人情の美なる側面のみを拾ひ、醜い方面、厭な部分は目を塞いで通り過ぎたといふ風があるゆゑ、外國の人々は、同氏の著書を読んだ時と實際我が人情風俗に觸れた時と、感を異にすることも屢々ありませう、併し我々日本人は同氏の著書を読むにつけて毎に慈母に對するやうな思ひがする。私しなども時々は餘り最負目過ぎて裏耻かしいやうな思ひつゝも、或は是れは餘り主觀的な見かたのやうだと思ひながらも、坐ろに感謝の涙を催したことがあつた。氏が日本風俗論の幾分が正當で、幾分が主觀的解釋であるかなといふ點も、大ぶ趣味ある論點かと思ふが、今はそれを論ずべき折でもなく、且つ私しは其の任でもないから、旁々今日は單に一種の短篇名家として

の故人を評して見ませう。いや、評てはない、私しの當初の感じのみを述べて見るのです。

私は世間の同氏愛敬者よりもはるかに後れて同氏の著書に觸れたので、しかも年代的には讀みませんでした、丸善で買求めた最初のは、たしか“Shadowings”及び“A Japanese Miscellany”それからその次が“*In Ghostly Japan*”であつたと思ひます。前者では「ユキヤク夢魔」に關する推理と「ユキヤク夢中の飛行」に關する説明とを最も面白く讀みました。後者では、犬の吠える聲を殆ど耳元に聞くやうに叙した一節又それに関する例の主觀的解釋及び“*At Yaidan*”と題した一文——浪の音を物すごく寫し出した獨得の筆、それが今も尙忘れられぬ。總じて海邊の事を叙記したのに佳いのがある。辭書家といふ評は屢々名文家の上に下される所で、小泉氏の如きも夙に此の褒稱を得てゐたらしいが、私はそれだけでは足らぬやうに思つた。同氏の筆は頗る音樂的である。平仄を整へるともなく、韻を踏むともなく、語調があのづから其の物の聲になつて鳴響してゐる。近いころ英譯でダンメンチオの小説を讀んで原文の特質を想像した場合にも、小泉氏の名文を連想したことであつた。

たしか其の次には“*Glimpses*”や“*Out of the East*”や“*Kokoro*”などいふ作を讀んだ。“*Glimpses*”を讀んだ時から個人としての同氏が慕はしくなつた。それまでは只名文家として愛讀してゐたに過ぎない。“*グリュムプセス*”は日本にての著書中の最も古いものゝ一つだが、最初の感じが寫されてあるだけに一しほ味ひがある。かの出雲中學の教師としての日記の如さを讀んでは、誰れしも愛敬

の心を生ぜざるを得ない。如何にも深切な優しい人柄が浮上つて見える、如何に心性を直覺することに秀でた人で、如何に觀察が穿細であるかが見える。就中「盆踊」の一章は絶妙です、新代の畫家などに話して畫にかゝせて見たい。

“Out of the East”の中にもいろ／＼面白いのがあるが、「柔術」と題したのは同氏得意の説であつたらしいから、讀まぬ人には是非讀んで貰ひたい、我が維新の大活動を柔術の極意に基くものと解し、通例悪しく見做す歐化熱を立派な意味に解し、さて日清戦争に論じ及ぶあたり、その論の當否はさておき、如何にも捉へかたが面白い。蓋し小泉氏の魔力は一に其の文にある、これは餘りに主観的な説明のやうだと思ひながらも、次第に引込まれて行かざるを得ないほどにチャーミングです。論でも話でも兎角枝に枝の花が咲いて、飛んだ脇路へ外れるが癖だが、その外れるのが本海道を行くよりも面白く、彌々外れて彌々愉快に感ぜしめる。かの“Ghostly Japan”のうちで、或は蒸物を論じ、或は犬の上を語る間に恍々として空想に耽るかとするれば、何時の間にか一種の哲理談へ融け込んでゆくのが何ともいはれなく面白かつたが、此の獨得の脈は多少濃淡を異にしてどの作をも／＼貫いてゐる。

“Exotics and Retrospectives”のうちでは、先づ「富士登山の記」が讀みものですが、それは題目を見て期待したほどではなかつた。時々白い雪が岩間に残つて見えるのを同氏が曾て見た黒く焼けた女の頭蓋骨の齒のみ白かつたのに比したあたり、且つそれから例の瞑想に入つて總て人間の理想は正體

に近づいて見れば皆かうしたものだと思つたあたりは流石に面白い。“Ketro.”のうちには却つて味の深いものがある。「美の凄哀」を論じ、「碧色の心理」を論じ、空色の何故になつかしいかを論じたあたり、特質が見えて尤も妙。此の篇中にも例の夢魔哲學の一片があり、又得意の輪廻論、遺傳論などもある。ブレトールと佛教とデアフィンとスペンサーとを打つて一九としようとする著者の哲學談は、論としての是非は別格の話だが、文章として見ると、如何にも神秘的色彩を帯んでゐて、何となく味ひが深い。S. “The Eternal Hunter”この小品がまた甚だ可憐です。ホオンオンのやうな筆附といつては言ひ足りない、着想の上には彼れ以外、あくまでも十九世紀末のロマンチストたる趣が見えてゐます。

「心」といふ作「骨董」「怪談」などいふ作も取々に見所があります。「心」の如きは東西文明是非論とも見做すべき箇所があるから、廿前後の人たちは兎も角も一讀なされるがよからう。

之れを要するに、故小泉氏の筆は、諸評家も已にいはれた如く、清新で流麗であると同時に寂しみを特質とし、神秘の影を帯んでゐます。基督教臭味を抜き去つたホオンオンのやうなところもあり、怖しみを和らげたアランポーのやうな脈も見え、ア、キングのやうに善良に深切に、アヂソンのやうに穿細に温潤に、時々ロマンチスト風の夢を見てゐるやうな朦朧とした悲觀的な骨脈も見え、それに十九世紀末らしい國體論やら、文明論やら、宗教論、哲學論、倫理論の綾糸が織入れられ、とりわけ一見相容

れまじきやうにも思はれるデア非ン一派の科學的精神が不思議にも調和を破らずに織入れられてあります。西洋最近の利己的、巧利的、機械的、繁文褥禮的の所謂物質的文明の大壓迫に堪へずして暫し東洋に隠れ家を求めた最も多感な最も多想像なファン、ド、シエークルの一天才の記念だと思へば、故小泉氏の著書は長く東西の文學史に特筆すべきものでありませう。(三十七年十二月)

百合若傳説の本源

遠きは今昔、宇治、中頃は伽、舞の本、下つては淨瑠璃類、八文字屋本、讀本、草冊子等によりて人口に膾炙せる物語のうちにて、其出所の明白に國史に因めるもあれば、古き巷説に原けるもあり、或は全くの空想に成れるらしきもあれば、外國種を我國振に引直せるものもあり、總じてやゝいかめしく武張りたるは人物の名だけなりとも、國史か口碑かに原きて出所の通り易きならひなるがなかに、一つ二つ不思議の例外と思はるゝがあり、百合若大臣の物語の如きは是れなり。

予が始めて百合若大臣の名を知りしは十二三歳のころ讀みし「大伴金道忠孝圖繪」(浪華の作者某著)なりきと覺ゆ、其の頃は眞鳥、金道、輕大臣、佐の宰相などを皆一つらに正史の人物と信じたりしが、長じて國史を學び雜書を讀むこと稍々多きに及びて、百合若の名のみは曾て相似たるをだにも史に見ざるを異しみたり、高麗或は蒙古征伐の大將たるほどの名將にして、力は爲朝を凌ぐばかりの強弓を引き四年の間孤島に棄られて俊寛僧都にも似たる艱難を嘗め、中ごろには靈應の之に奉仕するあり、末には賊臣を誅するの快舉あり、全くの架空談としては筋の餘りに複雑なるが不審なりと思ひながら、史家に質すこともなくて年を経たりき。

按ふに百合若傳説は最も廣く流布したるもの、一なるが如し、されど之れに關して予が知れる限りは太だ狭し、其の最も古きは伽草紙中に見ゆるものと聞きしが、未だ見ず。予が知れるは舞の本の中なるを最古とす。其の次に來るは古淨瑠璃の諸作なるべし。水谷不倒君の説によれば、井上播磨掾の正本に「百合若磨」あり、岡本文彌の「百合若高麗攻」ある由。予が讀みたるは寛文二年版の日暮小太夫の正本也。(小太夫は説教節の太夫なる由、これも不倒君の考證なり。)其他は巢林子が「百合若大臣野守鏡」爲永太郎兵衛の「百合稚高麗軍記」、前にいへる「大伴金道忠孝圖繪」などのみ。さて寛文二年版の筋立は舞の本の中なるを其の儘に潤色し敷衍したるまでにて、筋も人名も殆ど全く同じなれば、今は假に舞の本の最も古き筋立と見做して批判せんとす。萬一伽草子のを有せらるゝ人あらば異同を稽査せられたし。五月蠅けれど後段の考證に要あれば左に其の粗筋をかゝぐ。

嵯峨帝の御時、左大臣きんみつが大和泊瀬の觀音に祈りて得たる子に百合草若といふあり、十七にて右大臣になれり。さるほどに蒙古より我が朝を襲ふと聞えければ、神託によりて百合草若は總督に任ぜられ、鐵の弓箭を準備して弘仁七年二月に都を立ち、大臣殿の御勢は三十萬騎、其の外幾萬人を隨へて發向す。さて蒙古どもは四萬艘に打乗つて日本と唐土の潮境へ押出し、妖術を以て霧を降らせ、頻に討手を惱ます。(日暮木の挿畫によれば、蒙古は鬼面、人身也)。百合草若すなはち神に祈り、其の加護を得て霧を拂ひ、鐵の弓にて射立てければ、四萬艘に打乗つたる蒙古多く討たれて僅一萬艘になり「日本軍全勝となりぬ。

かくて此の凱旋の途次玄界島に上り「大力の辨やらん」寢入りて左右なく驚き給はて夜日三日ぞまどろみたまふ。「時に乳母子の別武兄弟逆心を起し、大臣は手蛇にて果てられたりと本船の將卒を欺き、眠れる百合草若を棄置きて歸國す。大臣は「船數八萬艘一度に帆を上げ楫を取」りし物音に驚き覺めて船を呼び、波間に躍り入りて追ひ試みしも効なく、獨り島にとまり、海草を摘みて命をつぎ憂き日敷を送りぬ。さる間別武兄弟は筑紫に歸着し、豊後に在る御寮所に大臣戰死の由を語り、尙都へ上りて左大臣夫婦をも欺き、刺へ御寮所に覽書を送りければ、御寮所怒りて自殺せんとす。乳母之れを止めて、別武へは御寮所に代りて「君の蒙古へ赴きの時、宇佐の宮に參り、千部の經を書き讀まん」と大願をかけ「既に七百餘部は果したれど尙二百餘部を剩したれば、今三年間俟ちてよと返書す。かくて御寮所は、いつ死ぬとも圖られればとて、大臣の紀念の品々をそれく、始末するるとて、大臣が伺ひならしもの足跡を解いて放ちける中に綠丸といふがあり、放たれて後遙かに玄界が島に渡り、大臣に近づきて見知られ、通信者となりて歸り、百合草若の存命を御寮所に知らす。されど再度の使の時身に重き物をつけたるに得堪へて島が根に落ちて死す。大臣見つけ、憫み歎くことあり。さる間豊後にては、御寮所が宇佐に七日籠りして大臣の無事を祈りしるしにや、いさの浦の釣人漂流して玄界が島に若き鬼の如き容貌したる大臣を救ひて伴ひ歸り、本名を知らざれば儼として使ひをれるを、別武聞傳へ、其の鬼の如き儼をやがて都へ具し上りて物笑の種にせんとて召寄せ、門脇の翁といふにあつておく。此の翁は年ころ大臣に仕へたりし者なりしが、尙ほ其の人とも心附かず。かくて翌年の正月、筑紫の在廳集りて弓のとうを始め、別武を祝ふことあり。足も顔も蒼蒼したるやうなれば、とて苦丸と呼ばれたる百合草若、矢取の役を命ぜられて弓場に侍し、わざと射術の拙きを笑ふ。別武怒りて、さらば汝試に一矢仕れ、

否といはゞ立所に切棄てんといふ。大臣、弓弱うして心に叶はずといひ、持來る隈りの弓を悉く引折る。別武大きに驚きながら、昔、大臣が用ひし鐵の弓矢を取寄せて、引けと命ず。大臣容易く之れを釋きて大音揚げ「我れをば誰れと思ふぞ。いにしへ島に棄てられし百合草若大臣が今春草と萌えいつる」云々と名宣りしかば、大友膳卿、松浦黨、一度に長り服従す。別武も走りおり、降参と手を合するを高手小手に縛め、其舌を抜き、尙首をば七日七夜引首にぞしたりける。云々。

こゝに別武兄弟とあるは「野守鏡」にては別府郷武者雲足、同雲澄といかめしく、末に別府親王と名宣りて、僭上の暴威を振ふ件は大友の眞鳥、平將門さながらなり。又出陣以前に百合草若の寢首を搔かんとする件ありて「大力の辨やらん」の一句は病癖といふ意味に取做され、「癖の長寢の死人同様」などありて、熟睡癖が一篇を貫ぬく伏線となれるもをかし。又「綠丸」といふ應は、此の作にては雌鷹の羽にて矧いだる矢の精なり。大臣が情婦立花といふの死體に宿りて玄界が島に渡り還城丸といふ子を生み、後、見あらはされて、飛去るあたりは、「大内鑑」なる葛の葉の前身たると明かなり。按ふに島より大臣を救ひいだし、いさの浦の釣人及び門脇の翁の役は府内の太夫秀主といふ忠臣及び其の子悪文次秀景市郎丸秀虎などに當るべく、尙舞の本などには無き人物にて此の作の立おやまは悪文次が妻の松が枝なるが、これは舞の本なる「入鹿」に見えたる鎌足偽盲目の件を女形に引直したるに外ならず。時代は平城天皇の御宇とありて、處其他、大筋は舞の本に同じ。

爲永太郎兵衛の「高麗軍記」は原の筋と隔ること甚しく、作としても見るに足らず。只一ついふべきはこれにては綠丸は原話通りの生きたる應にて、名を「青陽」と呼び、後に島に渡り來て大臣の爲に敵を防

ぎ、別府宗澄が三男三郎雲澄に切殺さると作り做したる事なり。原話にては健氣にも文使ひして途中に疲れ死し、こゝにては主の爲に忠戦して死す、共に應をして通信の役をなさしめ、兼ねてヘンスの料となせり。「忠孝圖繪」は原話を離るゝと更に甚しく詩趣蕩然たり、緑丸の事是には無し。要するに外國征討と島住居の件と應の通信と歸り來りての復讐といふことが百合若傳説の骨子なるが如し。百合若傳説の出所は古人も既に不審がりしものと見えて「松屋筆記」に「百合若草紙に見えたる百合若大臣未だ定かならず、豊後國志に大分君稚臣が事也といへり、大分君稚臣は天武紀に見えたる勇士にて豊後大分郡の人なり」とあり。(天武紀を案ずるに、只其の名見えたるのみにて何の事もなし。)又「鹽尻」には「百合若(或は大匠と稱す)豊後國船居に傳へて故事あり」といひ、次に「或説に百合若は清海公の三男、參議宇合、一には鳥養と稱せし此人なりと云、されども確なる古事を見侍らざりしなり」といひ又其の次に「百合若の女を萬壽と云(中略)奸臣別府太郎、同次郎が塚として別府村にあり(又略)百合若が愛せし鷹を緑丸と云(又略)凡百合若の事九州風土記の説にして昔其人ありと聞ゆ、されど古記實録に所見なきにや、上野國妙義山の脇に百合若の射貫きし岩ありて故事を語るもいぶかし、浦島が故事丹後風土記に見え、武州金川、信濃國寢覺にもいふが如し」とせり。尙ほ「嬉遊笑覽」にも「肥後國八代領内に百合若塚といふあり」と記したる前後に牽強の説一くだりありて「百合若は筑紫の人にて玄界が島にて鬼を平ぐるを百合若の舞に作り侍り、然るに奥州の島のうちに百合若島といふありて緑丸といふ鷹

のことまで確にある島あり」など見えたれど、これらは疑ふらくは舞の本又は古淨瑠璃等に原きて後人が假作せる地名、人名をさりと見ぬき得ずして立てたる臆説らしく、斯く引用するさへも徒ら事なるべくや。百合若といふ稚びたる名から、流石に異様に感ぜられけるにやあらん、舞の本には「夏のなかばの若なれば花にもよそへて育てよとて百合若どのと名をつけたり」と説明し、巢林子は別に本名を立て、「豊後の國の旗頭太宰の太郎和田丸」と名宣らせ「百人の力を合する強力」なるが故に、帝勅して百合若と命じたまふと故事つけたり。若と呼びながら大臣の位あるもいぶかしとてや、爲永は大臣に經昇るべき年齢資格ながら、繼母攝御前と賊臣宗澄とが奸計の爲、二十三才にして尙ほ前髪を拂はず、云々と解したり。或は宇合の子とし、或は宇合と同人とするなど、いづれも、百合といふ字面に繼りたる牽強なるべし。

さて斯やうの穿鑿三昧、そもく何の要あるにかと不審がる人もあらんかなれど、これは出所が出所だけに流石に棄てかねし仔細あり、實は近頃所要ありて希臘上代の事蹟を取調ぶる序に、彼の國の古名作及び之れを論じたるものなど二三つ讀みゆくうちに、ふと百合若物語とホーマアの名作オデッシーとが頗る相似たりと思ひ附くと同時にオデッシーの羅甸名のユリシスたることに思ひ及びて、と言はゞ餘は語らてもあるべきなれど、尙ほ普通の讀者の爲に二者の關係を説明して此の取調の局を結ぶべし。複雑なるオデッシー物語を約め説かんこといと困難なれば、こゝには百合若傳説に關係ある節々のみを

擧ぐべし。

オデッシウス又の名ユリシスは太古希臘なるイサカ國の君主にして膂力絶倫、兼れて奇策に富み、人稱へて多智王と稱す。希臘列國の聯合して小亞細亞なるトロイ王國を征するや一方の將となりて出陣し、十年の攻圍の間智勇兼備の譽れ高し。敵城陥るに及びて諸將と共に凱旋す、途中誤つて妖婦カリフソアの爲に魅せられて、其の部下と共に孤島に抑留せられ、年を重ねて歸る能はず。ユリシスが守護神にミテルゾといふ女神あり、ユリシスの爲に天神アウリスに哀訴し、カリフソアを諭してユリシスを放たしむ、然るにユリシスが諸島漂泊の業因尙ほ滅せずして、或は一眠の巨蠶の爲に、或は種々の女妖の爲に、或は水火等の過失の爲に、九死一生の厄に遭ふこと更に數回の後、竟にフイアシヤといふ海國に漂着し、其の國王に僥遇せられて歸國の便船を得、前後二十年を経て故郷イサカに上陸す。ミテルゾ再びユリシスに姿を現じて告げて曰はく、今や汝が王宮には幾多の悪積なる賓客ありて、賊臣と結託し、汝が妃ヘテロープが後配たらんことを望み日々燕飲して亡狀を極む、速に假裝してかしの赴き、汝の子テレマカスに力を發せて撥亂反正の功を遂ぐべしと。やがて神通力を以てユリシスを一老翁に化せしむ。ユリシスは救へのまゝに乞食姿となりて國內に入り、先づ舊老臣 *Lameus* ユーミヤスを訪れて暫く其の家に寄寓す。さる程に之れより先、ミテルゾ神の告によりて父の行方を尋ねんとて家出せし王子テレマカス、此の時外國より歸り來り、圖らずもユーミヤスの家にて父に遭ひ、主従親子の名宣りあり、それより相携へて王宮に入る。ユリシスは尙ほ乞食姿のまゝなり。さて人は未だ其の人としも知られどユリシスが愛犬アルカスの、今は老いて歩み得ぬほどに衰へたるが、さとも認めず嬉しげに尾を搖かし、やがて喜び死に死にぬ。かくてユリシスはアポロ神の祭典の日に、尙ほ乞食姿のまゝにて、亡狀なる賓客等の盛宴に侍し、侮辱せらるゝをも忍びて、報復の機を俟つ。時に妃ヘテロープは強請を拒むべき辭に窮して、若し夫ユリシスが手馴しの強弓を彎きて十二箇の環を射通すことを得る者あらば其の人の配たらんと約す。賓客等おの／＼弓を引き試む、一人の之れを能するものなし。ユリシス乞うて弓を彎き、剩へ十二環を射通し、一にはじめて本名を明し、返す一箭に元兇 *Antinous* を斃す。滿堂擾然たり。テレマカス及び舊臣甲乙ユリシスを助けて、奮闘し賓客及び賊臣等を壓にす。ヘテロープ夫に再會することを得て歡び極りて泣く、云々。

ユリシス王は百合若大臣、イサカは豊後、漂流中の妖魔は妖術を使ふ蒙古人、故國と漂流先との間に通信者となれる女神ミテルゾは綠丸といふ鷹たることは、ミテルゾが忽然として双翼を開いて上天する様を叙したる本文、又は海鷲となりて飛去る條などを思ひあはすれば明かなり。又ユリシスが老乞食となりて王宮に入るは昔丸の條に符合し、鐵の弓の件と十二環の件とは、正しく話の血統を同じうす。舞の本の門脇の翁、淨瑠璃の府内某はユーミヤスに該當し、王子テレマカスの役廻りは市郎丸秀虎、悪文次秀景、又愛應綠丸が非情の飛禽にありながら忠勤を盡して死するいぢらしさは、愛犬アルカスが主を見知りて喜び死に死すといふ條と因みあり。要するに百合若物語はオデッシーの粗筋を翻案したるものたるも些も疑ふべきにあらぬものから、いづこの國人より、いつごろ我が國には傳へたりけん、我が文藝復興のフロレンス、テンプルスともいふべき山口、堺などを經て生ひたちしならんかとも思はるれど未だ考へず。若しお伽草紙のを最古のものとするれば、今より四百年以上の昔なるべきが、それが尠くとも二千八九百年前に成りたる希臘太古の名篇而も東西古今に亘つて比類なき名作のオデッシーの翻案とは思ひがけなき關係にはあらずや。これによりて考ふれば我が足利以降の文學と西洋文學との交渉は、從來の考證以外にいて、更に尋ねべき點尠からざるが如し。

オデッシーとの關係は以上述べたるに盡きたれども、尙其れとは別に、巢林子が「野守鏡」に見えたる悪文次が妻の松ヶ枝が偽盲人となりて別武兄弟に近づき、苦計の爲に猛火に陥るを辭せざる段と希臘古

傳説との間に多少の聯絡あるものもあし。件の巢林子の脚色は、舞の本の中なる「入鹿」の末段、鎌足が偽盲人となりて入鹿に近づき、其愛兒の火中に陥りたるを故と救はずして入鹿に心をゆるさずる條に胚胎せること勿論なるが、件の偽盲人の件は、正しくユリシスに關する古傳説に原ける者ゝ如し。傳説によれば、始めアガメノン王がトロイ討伐の師を興すや、希臘列國の諸王此の役に與らざるはなし。然るにイサカ王ユリシスのみは、其最愛の妃ペテロプに別るゝを厭ふの餘り、伴りて狂を粧ひ、野牛と馬とを同じ犁車の軌に繋ぎ、海濱にいて、砂路を犁き、穀と稱して鹽を蒔く。バラミデスと云者あり、謀つて犁車の行く手にユリシスが愛兒テレマカスを横たへて試るみ、ユリシスが車を行るに忍びざるに及んで説破し、竟に従軍を肯ぜしむ、云々。是れ豈に入鹿に於ける鎌足が苦計の出所にあらずや。彼れにしては子を殺すに忍びずして伴狂を自白し、我れにありては子を殺しても國家の爲に盡す。苦計の種子は一ながら、國民精神と倫理思想の異なることによりて彼此按排を殊にする、面白からずや。

(三十九年一月)

學者頭と詩人頭

物の見かた、考へかたを大づもりに見れば、知惠學問に關係なく、古今東西を一貫せりと見ゆる二大區別あり、一方は科學家式、俗に碎いていへば學者肌の考へかたなり、他方は文藝家式、つゞめていへば詩人質の見かたなり。此の二つは陰陽の如く、男女の如く、匣と蓋との如く、相補つて初めて完き考へかたとなるものなれば、其の偏りたるには多少の過失あること勿論なり。

何事につけても先づ經驗を第一とし、事實や名目の取調を第二の必要件となし、且つ其の取調べたる事を分析し、解剖し、分類し、或は比較對照し、或は圖表、統計表を拵へ、徐ろに歸納し、或は反對説を萬べんなく檢べ、場合によつては自身で拵へて持出し、自ら詰り、自ら痛めつけ、それを又反駁し、辯解し、自問自答の獨相撲幾番の後にも、尙ほ念に念を入れて批判し、考察し、推理し、概括し、萬止むを得ぬ時には假定説などいふ間に合せの足場を築いて立脚し、さてやつとの事で最後の斷案を試る、是れが學者肌の本領なり。

耳目に觸るゝやがて直に其の物の本體を會得し、面倒なる工夫、段取を嫌ひ、推理、研鑽を経ず、一足飛に大體の考を纏むるを主とし、直覺を尙び、總合を重んじ、出来るものなら只、一つ二つ見聞したばかりで物の道理が百から千まで、底の底までも見え透くやうにありたく、叶ふべくんば一朝豁然として心機一轉して頓悟すると同時に宇宙の實體を直觀して自然人生を律すべき千古の天則を吞込んでしまひたく、尙十二分の慾をいはず、思ふとすぐに其の事が實行さるゝやうありたいものと願ひ、兼ねてさやう

の方面の心的作用に於ては慥かに先天的の特長を具へたりとも見ゆるもの、それが詩人質の持前なり。勿論双方共に教化、薰陶の効能乃至自省、自修の力によつて種々の變化、階級を生ずべく、學者肌ながらに詩人質の長所を兼ね、詩人だちにして學者肌の研究法を利用する大ぶ重寶な合ひの兒もあれば、中間ぶらりのどちらつかずで虻蜂捕らぬ出來ぞこねもあり、又いづれの役目も丸きり勤まらぬ全くの片輪ものも随分ある習ひなれど、先づ大體をいへば、所謂學者肌は血の氣の薄いはらの頭腦の作用あり。その美なるものについていへば、注意深く、思慮細かく、逆上せず、ひがまず、くねることなく、かたよることなく、心にちちつきあつて事物を八面から鑑定する餘裕ある也。但し其の二の町なる者に至つては、ちつかなびつくり類し、因循に類し、吞込わるく、機轉鈍く、些細の勘定までも算盤とらねば氣がすまず、何事も十二分考へぬいた上でなくては決斷のつかぬといふ姑息肌、どちらかといへば老人かたぎなり。然るに詩人質は之れに反して、小氣味よいほど突飛的なり、尤も聰明だの、機敏だの、一を聞いて十を知るだのといふは其の美なるものを褒め立てた言葉ながら、總體に吞込よく、事の分り早し。若し夫れ其の似て非なるものに至つては氣短かの向う見ず、とつたか見たかの早吞込だけに大づかみは勿論、勘たがへ、はきちがへ、屢あり。すべて考へかた馬車馬の走るが如く一直線にして、右左りさへも顧ることなし。血氣の頃は俗人も學者も男も女も、實は大抵是れ也。さればダーフィン一派の科學者に言はすれば、かくの如きは「劣等、種族の特質」との事にて、大人に尠く、少年に多く、男に尠く、

女に多く、學者よりも無學者、文明人よりも未開人、英人、獨人などよりも日本人、支那人などに多き肌合にて、畢竟は鍛鍊の足らぬ程度の頭腦、主として本能的に働く類の頭腦を意味し、いづれかといへば女性肌の心性 *womanish quality of mind* といふべきものと一概に貶す次第なれど、彼のヘルデル、シリング等音頭取としたる近世の詩人、藝術家の辯護者、所謂ロマンチスト等にはすれば、直覺に秀づるは人の最も人たる所以にして、宇宙の實相に悟入するの法は此のものに頼るの外なし、直覺は是れ第二の視力、天の賜へる豫言の資、彼のニュートンが地心引力の發明、彼のゲーテが植物學上の創見、いづれも皆演繹の結果、直覺の作用、哲學的問題とてもトッのつまりは是れ沙汰、其の他投機商の駈引、宗教家の頓悟、古往今來何事にもあれ煎じつめた果は大概此のもの、庇を被らぬものあるまじ、ブレトは此れあるが爲にアリストートルよりも大なり、ペトコンが到底シェイクスピアたるべからざるも此のもの、力なり、曰はくどうした、曰はくかうしたと効能しらべとめど無かるべし。寔にそれも一理にして此れもまた一利なり。按ふに學者肌は眞昏暗の中を巻尺をたくつて小田原提灯をぶらさげて、方十里といふにめげもせず、地勢の探検を試みんとする氣の長さ隱居などに喩ふべしあぶなげのない所が取りえなれど、まだるつこいこと此の上なし。これに對して詩人質は提灯の微小を卑み、老人の迂遠を嘲り、自轉車で五重の塔にかけつけ、其の頂に馳登つて偶然の閃電を俟つ短氣者の如し、同じく方十里の山水の全景をば只一瞥の下に見て取らうといふ魂胆なり。いかさま此れは機

轉の利いた巧い思附には相違なけれど、いつ首尾よく稻妻が閃くやら知れたものでなく、萬一草臥れて假寐の間に通りぬけてしまつたら、一生昏闇に立往生して石龜の地舖を踏まざるを得ざるべし。幸ひ都合よく閃電があつたりとしても、それによつて全景を瞥見したるは己ればかりとする時は、書などにかいて見すれば格別、さなくば我れ面白の獨合點にとゞまり、他に傳ふるの術なかるべし。そこに至ると小田原提灯は百萬も千萬も製造自在、配分自在のこととて、凡人も俗骨も女も子供もその恩澤にあづかることを得る便宜あり。是れ此の勝劣が考へ物たる所以なり。

伊豆の國の海岸に三尊窟と呼ぶ名所あり、其のあたり巉巖をそろしく峙つて浪風いと荒くすさまじければ不漸は船を寄せがたし、麗かに晴れたる日、纔かに退潮を俟つて櫓を操り、辛うじて窟の内部に進み入るに、高浪は船を弄んで大いに高く僅かに低く、屢岩の天井に打あたつて微塵ともならん危険を忍び浪の下るを機として漕入り、さて遙かに奥の方を窺ふ時は、髣髴三體の黄金佛が黒暗々中の巖壁に當つて燦然としてきらめくを認むることあり、但しこれ浪の下る只一刹那の機勢なれば、信心極めて堅固にして冥助甚深のものならずば見そこなふこと勿論なりといふ。

さて俗説はかくの如くなれど、其の事實を叩けば、此のもの阿彌陀佛でも何でもなし、纔かに閃き入る日光が暗中の巖に映ずるとき、先入主となつたる看る者の成心が迎へて以てしか解するのみ、猶品川の廿六夜待に今も尚ほ東京の翁媪連がチラと出かたの月の影のほのかなるをば三尊の阿彌陀さまと拜む

がごとし。所謂主觀的の解釋に外ならず、手前尺度の測量なり。而して詩人式の考へはともすれば、此れに類し易き所に病ひあるなり。

かうはいふもの、此の詩人式の考へかたには慥かに人心を魅する魔力あるなり。その名目のつけかた、解釋の鹽梅にこそ疵あれ、本場仕込の直覺家が睨みには、必ず何か一廉か二廉位は遍通不朽のうまみ、有りがたみ有つて、そとろに涙ぐまるべかり、いつまでも棄てがたし。例へば、希臘文明の絶頂に立つて長へに人間が渴仰心を歌ひかなづるにやと思はる、プレトリーが理想論、何がさて自立、自利一邊の武斷時代の眞只中に生れて南北東西に亘つて萬古變るまじき人間社會經綸の大緯を繰出したりと見ゆる基督が絶對訓、乃至老莊が直觀に成れる一種の復初説、近うしてはルッソーが感慨に生れし自然論、感情主義、此れも彼れもいづれ皆同じ流れの産物にあらざるはなしと考へて見れば、此の式の有難がらるゝも理り千萬といふべき也。いや、そればかりで無し。彼の中世の神秘論派が獨合點の達觀、ロマンチック哲學者が大獨斷の空中伽藍、ニイチエが空想、トルストイが一邊觀と大科學者にでもなつた積りて叩き崩さうとするもの、氣を持直して目の据ゑ方を換ふるときは、崩しかけた其の目前に碎けて散らばる明月や夜光、碧玉、紅玉、燦爛錯落、眞珠やら瑠璃やら、それを悉く拾ひ集めたならば、明光大ラポラトリーの黒暗を照して餘光幾千燭光の電氣燈をも凌ぐことなきを保せず。只どうして拾ひ集めたものであらうか、疑問なり。

要するに學者肌の長所は其の愼嚴周密にして一言一斷苟もせざる所にあり、而して其の短は煩瑣迂遠の形式、繁疑不斷の内容、無情に似たる其の冷淡、其の乾燥、殘忍に類する其の苛細、其の深刻、其の屑々と其の拘々と其の整々と其の齷々、さながら地藏尊の恵に洩れし賽の河原のいたいけ亡者の、積んでも崩れ、積んでは崩す小石細工埒あきかねて、待てども／＼出來ず、千年萬年待つたとても恐らく此の爲體ではと覺束なく思はるゝ所が弱身なり。それに反して詩人式の長所は單刀直入、直指人心、或時は拈華微笑の幽玄、或時は不立文字の簡淨、漲る黒煙、めまぐるしい陰影には目もくれず、飛びかゝつて化物の正體を引捉へ、鳶口只一挺大紅蓮、小紅蓮の眞只中へ向う額巻て躍り込む氣負ひの働き、きび／＼と心地よき直截、思ひ切つたる手つ取早さは純粹の學者肌のかけても眞似えぬ所ながら、たゞ困つたことには、かゝる考へかたの弊として、兎角手前尺度の測量に陥り易く、情に眼昏みて一寸前の文目も分らぬことあり。然らざるも其の咄嗟の心的作用たるより生ずる自からなる結果として、おしなべて疎枝大葉の觀察、散漫にして簡麗、甚しきは孟浪杜撰、支離滅裂、自家撞着、前後矛盾勝手次第、さなきものも盧山の格好を只一面から窺ひ、乃至稻妻てちらと見たる全景、只もう茫漠としたる大體觀なれば、己れすら程經れば夢の心地となりゆくを、同氣相求むる者、よしや一時は之れにすがつて何等か得たる所ありげに思ふとも、やがては元の木阿彌に立戻つて、精神上に寸益なく、胸に手をあて、考へて見れば風がはりの狐につまゝれたやうな心持ばかりが残るべし。

併しそれもよし。鱗のかしらも信心がらなれば窟の奥の日光が阿彌陀佛と拜まれしために勇猛精進の菩提ごゝろが奮ひ起り、神が憑いたと思ふばかりの二信で飛んだ目覺しい離れ藝のしてのけらるゝ不思議の利益なきにしもあらざるべければ、詩人式も臨機の方箋としては重んじ用ひて然るべきものなり。只いづも／＼此の呼吸一つにて宇宙百端の料理鹽梅が出来ること、心得る手合こそ氣の毒、殊に其の柄でも無い癖に見事此の式で押通さるゝこと、僭上がるやからこそ氣の毒なれ。眞物にさへ色盲、藪晚多からば、霞ひ、受賣には皆目にも劣るものあるべき理なり。皆目見えざるは始末よし、見當大きにちがつたるに、自身はちがつたりと思はぬ者ほど世に厄介なるものはあらず。

併しそれもよし。只此の詩人式の考へかたが他の學者式に比して尊然立優つたる思想式なるかの如く寡聞の青年者間に言ひ囃され、其の簡便な所が無精者共の氣に入つて、唯一無上の思想式でもあるかのやうに崇められ、一切の思想の是非、宗教から道德、人倫の根本義、日常實際の舉措進退までが之れによつて律せられんとする傾あるに至つては、着實なる人々の取越苦勞せらるゝ、もつとも至極ならずや。

今日の思想界が前古未曾有の大亂脈にして人々思ひ／＼ともいふべき亂調子なれば、之れを分つて相對峙する二派又は三派となさんは、到底望まざるまじきこと、一應は見ゆれども、若し假に何とかして強ひて二大別し得るものとするれば、その法は只一あらんのみ。即ち形式上よりは上に謂へる學者式と詩

人式とに分つことは是れなり。さて又内容上よりは所謂「開化」「文明」「社會の進化」を讚美することに於て大同する者と之れを呪咀することに於て大同する者とに分つことは是れなり。千分萬裂、紛々然、錯々然、霧々然たる混戰亂闘の中に於て此の二つばかりは稍々鮮明なる旗色なり。

然るに詩人又は詩人式の思想家は比較的によく呪咀軍に投じ、學者乃至學者式の思想家は比較的によく讚美軍に馳參す、是れ先づ頗る注目すべき現象なり。次に注意を要するは、此の二大思想式の對峙が社會進歩の要具たることは是れなり、即ち一方は二三の大樹のみを見て全林を見ず、他方は無數の樹々を見て同じく全林を括る能はざるの概あるが故に、彼れに三分の實相、此れに七分の眞理、少しく檢覈すれば、決して偏棄すべからざるの理明かなると同時に、双方の内容を分析し、比較し、その一々に就いて勝劣是非を明かに決せずもあらば、「文明」の是非曖昧となつて、世に處し身を修むるに當り、去就進退に迷ふ者生ずべく、殊に青年者流は詩人式の説を悦ぶ習ひなれば、或は爰に飾非の口實を得て品性墮落の縁を醸さんもの必ずなしともいふべからず、要するに文明是非の鐵案を下すことは今の德育上の一要務なりといふことは是れなり。

次に更に注意すべきは「文明」の呪咀に於て大體は相同意したる詩人者流が其の内容の是非に至つては往々甚しく相牴牾し、或は甚しき自家撞着を包藏せること、即ち此れと彼れとを相照らし、前説と後説とを對照せしむれば必然慘烈なる同士打を生じ、其の論半以上自殺又は敗走に歸すること是なり。ソラ

とトルストイ、トルストイとニイチュ、ニイチュとイブセンなどは其の手近き例證とも見るべし。その他所謂ロマンチシストの亞流中にもかゝる例は乏しからず。本營既に然り、その旗色によつて動く野武士の群れに至つては、一知半解の必然の結果として、精刻なる批判の一突撃に逢ふときは潰え走らんこと一定なり。

只其の批判の法、辯明の法が工夫物にして厄介物なり。學者式を以てせんか、肝腎の讀んで貰ひたき當の相手が讀んで呉れまじく、さりとて詩人式を以てせんか、是れ五寸を以て五寸に易へ、暴を以て暴に易ふるの似たり寄つたりなり、さて何としたものか、工夫つき易からず。

此の論まだ終つたのにあらざれば、いづれ題を改めてまた説く所あるべし。(三十六年)

「文明」の研究

同じく「文明の研究」といふうちにも様々の色別けあり、彼のモンテスキュー、バックル、ドレーバア諸家の如くに主として歐洲文明の由つて來れる經歷を演繹的に推論するもあれば、最近の文明史家の如く

に成るべく推理を避け、批判を慎み、専ら精選せる事實を平叙し、隠約の間に因縁果報の連鎖をほのめかし、其の最後の判断は成るべく之れを讀者が心々に一任すること彼の獨逸邊の文明史家の如きもあり、これら皆一種の「文明研究」なり。或はまた更に遠く開化の源流に遡つて、此の人間社會が原始自然の混沌單純の状態より現に見るが如き複雑多端の所謂文明社會と成り來れる其の發展の蹟を考覈して、歐と言はず、亞と限らず、廣く東西古今に涉つて、恰く「文明」の由緒を探り、進化の因縁を明かにせんと試る者あり、而して之れを爲すに當つて一方には例の單刀直入に其の因果の理を推斷せんとする詩人式もあれば、他方には徐ろに因果の連鎖を手繰つて歸納的に取調を進むる學者式もあり。要するに其の手段方法を様々なれ、コントもスベンサアも此の意味に於ける「文明研究」の同行にして、近くば彼の進化律に立脚せる社會學者連中、ウォード、ギッヂングスが一流も先づは同じ鱗の魚族と見て差支無し。假に以上諸派を總稱して因縁上より文明を研究する者と做す。

或はまた専ら文明の濫觴即ち原始状態ばかりを取調ぶる學者もあり、未開時代の言語、法律、技術、習俗、宗教、道德等、總じて後に至り發展して所謂文明の要素となれるものを其の源泉について研究すること手近くは例のラボック一流の如きもの、かゝる類の文明研究は人類學専門家の著書中に就いて求めなば一大ライブラリーをなすほどに夥しきことなるべし。

又は主として文明の精髓即ち國家をして文明たらしむる所以の原動力(モチーヴパワー)の何たるかを論究して之れが鼓吹獎勵に努力したる者もあり。例へば、コントの人情に於ける、カーライルの入傑に於ける、バックルの科學に於ける、近くはキッドの物質的兼社會的境遇の改良に於けるなど、原動力のつかまへかたこそ論者の氣質々々を現して同じからざれ、他くまでも實際問題として文明論に熱衷せる模様は相同じ。按ふにかゝる態度は文明其の者を論じたものといはんよりは、おのが經世策上より若しくは理想上より文明を論じたものといひて妥當なるべし。

或はまた利害得失の上より、文明を論ずる者あり、一層適切にいへば、世俗が所謂文明の利益恩澤の夥しく且つ端手やかなるに眼眩み、只其の利あるを見て弊害の甚しきものあるを知らざるが如きを慨々憤るの餘り、主として文明の流弊を數へ、或は「大道廢れて仁義あり」と唱へ、或は「自然に復れ」と叫び、文化人工の加はらざりし古代の方が今よりも遙かに善美なりしやうに説く者あり、或はさほどに極言せざるも頗る文明の利澤を疑ふ者あり。例へば、ルッソーが非文明論、ロマンチスト等が所見、近くばフルードの進歩論、カーベンタアの文明論、ラスキン、モオリス等詩人文學者が著述中に散見せる非文明論、ニイチェ、トルストイ、ゴルキーなど最近諸作家が所見乃至或一派の宗教家の論說など。これらは直接に本論に關係ある所謂文明呪咀軍の大旗下に屬すべきものなれば、折々引合にいたす便宜上、假に總稱を附して濃淡厚薄引つくるめて非文明論者と名づけおくべし。

或はまた主として現文明の成行きを占ひ、或は暗き或は明るき將來のたゞずまひを豫察せんと試る者

あり。ヒヤンンの“National Life and Character”の如き、マンスの“Anticipation”の如き、彼の黃禍論を主眼とせる諸著の如き、其の他ヘラマーの“Looking Backward”の如きを筆頭と做せる彼の理想國物語一流の小説家乃至“Caesar's Column”の如き大破壊、大動亂を豫言する一派の傾向小説など、これらは専ら豫想上より現文明の傾向を研究するものと見做しつべし。

更にまた一派の研究者あり、そは文明の要素調べを眼目として甚だ生かじめたる學者式にて、或は多少詩人式をも取りまぜて、文明其の者を研究せんと試むる輩なり、一二の例を擧ぐれば、ハーリスが“Civilization as Science”、フエルガンの“The Philosophy of Civilization”乃至クロージヤアの“Civilization”のたぐひ是れなり。按ふに文明といふ語が十九世紀以來の大流行語なるだけに、此の流の研究に成れる著書は列國に涉つて求めなば定めし汗牛充棟ならん。

さて以上種々の研究法あるが中にて此の最後の取調は、言はく研究の土臺石を据多つくるやうなものにて最も大切なることと思はるゝなり。夫の濫觴しらへ、因縁しらへなどは或は定義沙汰を二の次になし、又は大概の定義で間に合せても済むべきが、利害得失を論斷し又は其の精髓、原動力などいふものを論定せんとするに當つて肝腎勘文の「文明」の定義がさまならず、其の要素さへもあやふやなるは、譬へば敵味方を見定めずして突貫の號令を下し、真くらやみのなかに新稿柄のよしあしを論じあふやうなものにて傍ら痛し。成程、定義調べなどいふことは随分學者式中の仕事としても興味索然たる仕事

にて、天下如何にも太平げにちのれが讀みたる限りのあらゆる著述より見當りたる限りのあらゆる定義を寫し取つて来て一山百文並に陳列し、あれかこれかと心長く比較研究に及ぶに至つては到底腦充血連中の我慢し得る所にあらずと雖も、さりとてまた首から定義調べなどは五月蠅し、またるつこしと罵つて穢地せつしに是非論の本營に亂入し雌雄を一舉に決せんと試るは、是れまた甚しき事毀ことこしにして、取りも直さず彼の緒を見附るだけの辛抱がしきれぬために幾百束の絹糸を茶々無茶苦茶に纏れさせてしまふ手合と相擇ぶ所なし。尠くとも「文明」の要素は何々、其の根本義は何、其の定義は如何位の地ならしは是非止むを得ざる研究者の義務なりと思はざるべからざるなり。

さるによつて、先づ兎も角も「文明」といふことの内容調べに着手せんに、先づ此の語の根本義に凡そ三つの要素あり、一は進歩發展といふこと、二は團體本位といふこと、三は比較上最善なる状態といふこと、是れなり。以下此の三要素につきて少しく解釋を試みん。

第一「文明とは進歩發展したる人間の状態なり」といふこと、此れは文明論の中興ギゾーこのかた諸文明論者のほゞ一様に必須と認めたる一要件なるのみならず、随分激烈なる非文明論者と雖も、よし意味の取りやうは異るとも、幾分かは認めざるを得ざる所なり。例へば、精神上の進歩は認めざるも物質上の進歩は認めざるを得ざるが如き、道德上の發展は認めざるも知能上の發展は認めざるを得ざるが如き、是れなり。

第二「謂ふ所の進歩、發展は個人を本位とせずして團體を本位とすといふこと」、くはしくいへば、文明とは個人としての人間の狀態が發展進歩せるを主とするにあらずして團體(社會全體)としての人間狀態が發展進歩せるを主とすといふこと、按ふに是れも亦た文明論者間の輿論たるに近し。古くはギゾーの如きも、一面に於ては個人の發展を重んじたると同時に明かに「社會の圓滿に成りゆくこと、是れ文明の根本義なり」といひ、ハーリスも「社會といふことは文明の精髓なり、これなくば文明は存在せず」といひ、フェルガンソンも「文明とは社會的状態をいふ、社會外に在る人間は文明の感化外に在るにひとし」云々へり。

さて此の個人本位か、團體本位かといふことは餘り緊要にもあらぬ閑問題の如くなれども、多少是非論に關係あるゆゑ、後々の邪魔にならざらんため、一通り爰に辯じおくべし。世の非文明論者の中には偉大なる個人を養成することが文明の本來面目なるかの如くに解して、切りに其の名の實に伴はざるを口實として現代の社會を責め罵るものあり、奸佞怯懦の徒は輩出し、大聖大賢は全く跡を絶つ、大英傑もいづること稀に、大詩人、大藝術家のいづることも稀なり、古へに比して劣るとも勝る所なし、かくの如きもの之れを文明といはるべしやといふものあり。按ずるにこれは大ぶ的違ひの氣味なり。いかさま、道德程度、技能程度の大きに進歩したる少數の個人を輩出せしむることが文明の本旨ならば、釋迦も出ず、仲尼も起たず、基督、ソクラテス、弘法、日蓮、ホーマアやシェークスピア、フィチヤスやミケ

ランゼロ、成吉思汗やアレキサンダア、其他此のたぐひの偉人、天才がねつから出て來らざる今の社會は、恐らく大失敗の文明ならんが、社會全體の品位と調子、即ち社會全體の知識、道德、技能其他の水準を比較上高めるとが文明の本意なりとすれば、數百年以前の最上流の知識の平均は今の中流以下のよりも低かるべく、個人的には退歩せり、墮落せりと文明の讚美者みづからも認めざるを得ざる道德とても、社會全體の上より見ば、數千年前は勿論、數百年前に比しても今日の調子の方が遙かに高く高かるべし。成程、上中下ともに偽善者は夥しかるべく、知識ばかり、口先ばかりなる場合もいとく夥しかるべけれど、而も數千年乃至數百年以前には單に上流中流にのみ貫流したりし道德の潮汐(例へば、四海同胞といふ感情、動物にまでも同情する感情の如き)が今は最下流にも波及しつゝあること事實なれば、個人について言はず平均上よりいふときは今の方がいにしへよりも勝るべし。キッドがその「社會進化論」中にいへる道德思想の擴充も、かく解し來れば事實なり。即ち史に傳へ來れるが如き聖人や賢人は絶無なる代りに彼の子路、子貢程度、十二弟子程度の人物に於ては必しも乏しきを告げざること所謂文明社會の特質なるが如し。之れを要するに、一國の文野は偉人、天才の有り無しによつて決せらるゝにはあらずして偉人、天才を解し得る力、容れ得る力の多少によつて決せらるゝなり。偉人、天才は未開時代にも出て「文明時代にも出づれども、只一つ異なるは、未開時代は之れを解し得ず、容れ得ざることを多くして、或は迫害し、殺戮し、或は悶死せしめ、徒らに埋没せしむ。基督にして十九世紀

にいてなば十字架上の厄難あるべき筈なく、ソクラテスをして廿世紀にあらしめば彼れを獄に下す程の事だにも殆どあるべからずと思はるゝなり。又コロムブス以前に幾多冒険の航海者ありき、就中メキシコ発見者の如きは東西兩洋にわたつて調べなば二人三人のみにはあらざるべし、而も前者は當社會に歓迎せられ、後者は皆當代には其の名さへも得知られず、否敢て知らしむるだけの便宜なく自信もなく埋れ果てたり。一つは交通の不便にもよりたらんが、主として社會の我れを解すまじく、容るまじきことを豫想したればなるべし。宗教界に於ても、學問界に於ても、之れに似たることは幾らもあり、彼の英のウィックリフが其の熱誠と技倆とに於ては必しもルーテルに劣らずして而も其の功を奏せざりしが如き、彼の佛のラマルクが勿論其の説に精粗の差こそはあれ、ダーウィン、ヘッケルよりも遙かに以前に同じく進化論を唱道しながら殆ど何等の反響をも得ざりしが如き、いづれも其の時代の未開なりし證、非文明的なりし證據なり。よりて考ふるに、文明は猶地味、季候の如し、神卉、靈艸をして能く花咲かしめ實を結ばしむるや否やによりて其の地の靈凡の定め得らるゝが如く、偉人、天才をして首尾よく功を成さしむるや否やによりて其の國の文野を決すべしと比喻せば如何。所謂文明は果して讚美すべきものなるか、將た呪咀すべきものなるかは別問題として、そが個人的状態を指すにはあらずして、主として、社會的状态を指せるものたる一塵だけは以上の解によりてほゞ定まれりと見做すことを得べし。

さて第一と第二との取調べによりて「文明とは進歩發達したる社會的状态なり」といふことだけは先づあらかた定まりたるものとして、更に第三の要件たる「比較上最も善き方へ向ひつゝある社會の状態」といふことの當否如何を検せん、さて是れこそは文明是非論の分かるゝ所以の根本問題なるだけに、大ぶ厄介なる代物なり。何となれば、先づ、「過去に比して善き方へ向ふ」といふ一條件は如何ばかり確實なる基礎の上に立てるにや、果していつまでも維持せられ得べき合理の見解なりや、若しや文明も或程度に達すれば、恰も彼の一個人が壯強極つて老に入り、老積りて遂に墮するが如く、次第に老朽し若しくは糜爛しゆくやうのことはあらずや、希臘や支那の文明がいつしか窮極して亡びしが如き同じ轍を踏むことはあらずや、進化と退化とは相表裏して宛然糾へる繩の如くなるにはあらざるか、進歩發展といふことは、語を換ふれば、次第に増長し、募りゆき、甚しくなりまさるといふ意味にも解せらるゝにあらずや、されば進化といふことは其のはじめより成住壞滅の悲惨なる理法を暗示しつゝあるにはあらずや、即ち文明には定壽あるにあらざるか、されば文明よりも未開の方が寧ろ理想的の社會状態にはあらずやなどいふ種々の疑問滾々として泉の湧くが如くに起り來ればなり。

さてかく論じ來つて見れば事が稍と面倒となるなり。従前の如く今の所謂文明を頭から一種善美なる方向へ進歩發達したる人間社會の有様、未開、半開の状態よりは遙かに優れるものと認定し、よしや若干の缺陷、餘弊等があらうとも、兎に角比較的に慶び迎へて讚美稱揚すべきものと信じ込みたり

し時分とちがひ、既に文明の定義を疑ひ且つ其の利害得失を疑ふものが輩出し、呪咀黨、讚美黨と派分けまで出来て、嚴正に其の是非を決せざるべからざる今日と成つては、「文明」又は「シヰリゼーション」などいふ褒意を含める語は甚だ以て非科學的にして不便なりと言はざるべからず。蓋し「文明」とは易に所謂「天下文明」を連想し易きが故に「至善」「圓滿」「黄金時代」「文質彬彬」なども解せられ「シヰリゼーション」將た「都雅」「文雅」「高尚」など、要するに人間の幾段か高雅に成り登れる状態 *elevated state* と、語原上からも、慣用上からも連想せらるゝこと自然なり。然るに嚴密に批判を下すときは、目下文明を以て自ら居る歐米諸國の状態は其の原始自然の状態に比して大に發展し、大に進化したるものなることは言ふまでもなく明かなれども、(已に上にも反問せるが如く)かゝる發展、かゝる進化のトップのつまりは果して至善、至美の理想的結果を齎すべきものなりや否やは、畢竟謂ふ所是、非論の解決を俟つて後に定まるべき事にて、それまでは尙ほ一の疑問のみ。花が咲き盡して散り落ち、實が熟しきつて腐り爛るゝ例を思へば、大發展の其の裏面には大收縮が潜むとも疑はるべく、大進化の傍流には退化の暗潮があるらしとも推するを得べき理なり。若し果して然らば、今の歐米の社會状態を指して大進歩、大進化、大發達など稱するさへも大ぶ樂天氣の勝ち過ぎた獨斷の命名沙汰なるべきを、まして「文明」だの「シヰリゼーション」だのと目出たき名目を並べんこと恐らくは間ちがひの種ならん。何となれば、一に常識を標準として聞く者、讀む者は恐らく文明を非とすることを首から甚しき悖理なるが如く

に豫想すべく、或は無意義、自家撞着とも解すべく、或は其の反對なるは、其の美なる名の實に副はざるの甚しきを憤るの餘り、進歩、發達などいふことの全分を擧つて抛ち去らんと焦立つにも至るべし。是れ皆用語の弊なり。若し夫の「文明」を字の如く解し「高尚なる道義の波及せる時代」又は「眞善美具足の時代」、尠くとも故福澤翁が其の文明論中に述べたる定義通りの文明を指すなりといはゞ

(福澤翁の定義によれば、文明とは「天地間の事物を規則の内に籠絡すれども其の内に在る自から活動を違ふし人の氣快發にして常に惑溺せず身軀から其の身を支配して他の恩威に依頼せず、躬から徳を修め躬から智を研き古を慕はず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未來の大成を謀り進んで退かず達して止まらず、學問の道は虚ならずして發明の基を開き工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用ひて其幾分を餘し以て後日の謀を爲す」たぐひのものに外ならず)

今の激烈なる文明の呪咀者といふとも、強ち剛情にツンニヤそれでもないやだ、嫌ひだと草摺引の五郎がいふやうなことは言はざるべし。彼等は讀んで字の如き「文明」を惡むにはあらずして今の所謂と肩書の附く文明、否、むしろ進化といふことに伴ひ易き弊、發達といふものに隨ひがちなる流毒を惡めるなり、その證據には彼等の中に「偽文明」といふ語を慣用する者があるにも明かなり、即ち「文明」其の者を非とするのではなく「老老せる文明」「糜爛せる文明」一言に言へば「文明の弊」を非とするに外ならず、と斯う釋さばぐし、取捌いて見れば、非文明黨の呪咀は餘り埒の無き、たはい無きことゝも聞ゆべし、何となればどこの國にか偽文明や老老文明を歓迎し、進化の餘毒や流弊に讚美歌をささぐる輩があらう筈なければなり。よしや或一部にさる蒙昧の徒があればからとて、それが爲に偽となすべからず

る文明の要素をも抛ち若しくは弊となすべからざる部分の進化をも棄つるが如きは更に一倍の没分曉的の振舞なればなり。かくいはゞ、否々然らず、非文明黨の面々が嚴しく文明を非難するは今の所謂文明には種々の抜くべからざる悪弊流毒がさながら累代の遺傳病の如く、又は三つ子時代から染込しみこんだる悪癖の如く、烏鵲式にへばりつき、怨靈並に附き纏ひて、逆もく、如何なる良方箋を以てするも決して之を根切にするの望みは、理論上は兎も角も、實際に於ては成立ちがたきが故に、さてこそ其の弊を惡むの餘り是非なく文明の全體をも惡むなり、畢竟足下等は歐洲に於ける偽文明、老老文明の弊害が如何程に甚しき度合に立到れるかを察り知ることが出来ねばこそさる悠長らしき論をも立つれ、佛國革命の前例又は我が維新の大變にても知らるべきが如く、百年以上の積弊が甚しく重疊し、凝着し、固結したる場合には、鋤鎌は勿論、鐵挺かねてでも鉦かねでも役に立つとにあらざ、修繕つくひや取舍けさは姑息の沙汰、根つきは到底出来ぬ相談、さういふ場合には悉く打毀うちこぼして建直すか、全く別の地に建前をするか、それより外には工夫なし、今の呪咀者の見る所また此の意味に外ならざるを知らぬか、と辨解する者もあらんかなれども、それがかの例の詩人式の短慮に近し。ろくく脈も診ず、病症の見當もつかぬうちに此の病ひ他にも療治の見込なし、截開々々と叫ぶやうなものにて、玉石共に焚くの悔あらずんば幸ひなりと云はざるべからず。(此稿尙齊きつぐべき心組なりしが中絶す、廿七年)

牛のよだれ

知らぬが佛といふことは古い諺なれども、知つたが地獄とは今の世の人の上なり。十九世紀以來假にも文明國の仲間入せる國民にして、誰れやらの所謂「自知の怖しき訓練」を経験せざるものなきは今更にはずともながら、廿世紀に入つて此風潮東洋の新參國しんさんこくを同じ渦中に卷込み、「自意識病」といふものが管育かんいくに入りかけた證據には、東西とも神經衰弱の大流行、世間に青瓢箪のやうな男ばかり夥しくなるは氣のひけるとなり。自覺、自知を社會大進化の賜と謳歌し、自然に役せられずして逆まに自然を役し、人爲を以てして天工を補ふことこれが人間の人間たる本價ほんげだなどと謳歌した口振はいつの間にかおひおひ減り、野蠻や子供の何にも知らぬのを無上に羨ましがり、二言目には文明といふものを先祖以來ちつとも世話になつたとの無い仇敵でゝもあるかのやうは疾やくがり、繁文褥禮、汽車、電車、會社、製造所、いづれも人間の小才覺を以てして天然の善美を毀損するものに外ならずと泡を吹いて慷慨し、疖かさをかぶらせた眼で觀るゆゑ、見聞くものが氣に逆ひ、神經は彌々過敏になり、自意識益々鋭くなる爲、未開人には針ほどの苦みたるべきことをも棒で刺られた程に感じて苦悶すること文明社會の現状にして、

餘り名譽でもなければ、お互ひに多少経験する所なり。此爲躰にてこゝ三四代遺傳を重ねなば、「時代病」オプゼ、エーツァン、ド、シエーケ「世紀末」オプゼ、エーツァン、ド、シエーケなどいふ名稱はやがて「人間病」「世界末」などと改稱されることとなつて、天が下を擧つて半さちがひ、半よいくのやうな人間ばかりになつてしまふのではあるまいかといふ取越苦勞も萬更無理にはあらず。文明呪咀黨の所謂現代の諸弊は一へにこゝに發源するかも疑はる。夫れ詩人、作家、藝術家は仲間中には、褒めて豫言者などと稱すれども、俗人にははすれば、其の國、其の時の最も薄手な人間、凍りつめた諏訪の湖に墜へなば最も春暖に感じ易き部分、瀬戸物ならば瑕入り、國民としては豫め素因あつて最も早く時代病に罹り易き蒲柳の質とも解し得らるべし。さすれば彼等が好んで寫す所の人物は、大昔の小説のとはちがひ、總じて假面を被つた作家自身であると同時に、恐らくは當に來るべき人間を暗示するのことも想像せられ、歐洲作家の或作を讀みては羅甸民族滅亡の豫言も如何さま全くの夢話でないらしく思はるゝ消息乏しからず。かくまで自意識が深刻となり強烈となるに至つてはと杞憂を抱く人おひくゝに増加す。予の如きも全の他人のこと、思はれぬゆゑに自他のために寒心すること屢なり。

そもく自意識のかくの如く過度に發達するに至れるは、餘り久しき間他力ばかりを頼み過ぎ、他律ばかりを尊び過ぎし反動とも見るべきなり。他方とは神、運命、自然等の力をいひ、他律を尊ぶとは君父の命令、輿論、習俗等に律せらるゝことをいふ。姑らく時局の影響によつて特別の心状態を生じたる

我が國人を除外していへば、今の文明國人の最新代に屬するものゝ眼中には先づ兎角君もなく、父もなく、神もなし、といふが當然なり。ロマンチズム勃興の當時に詩人、藝術家の間にのみ唱へられ又は實行せられたりし美的生活、本能満足は、今は普通人の言ふ所、行ふ所なるが如し、彼等は夫れ奇蹟を信ぜず、他界、未來世を信ぜず、祈禱力をも信ぜず。たましく神を奉ずる者あるも、其の所謂神は主觀的の神にして、めい／＼が思ひ／＼に立つる所なり。イブセンが『ブランド』に

“Ye need, such feebleness to brook,

A God who'll through his fingers look,

Who, like yourselves, is lousy grown.

Mine is another kind of god!”

とあるは善く此の間の消息を傳へたり。彼のハツブトマンの作にもまた同様の意味見えたり。畢竟在來の神様は最早惹けて了はれたるなり。現代の所謂神は常人が主觀の投影、其の人みづからの理想たるに外ならず。つまり今人は何事につけても自分一個の判断を標準とするなれば、自分の心以外に信仰の的もなく、本尊もなく、頼り所もなし。此の意味に於ける「自己中心主義」は實に十九世紀以來の時代精神なり。之れを主觀神と名づくるも可なるべし。さてかくなりては、眼中に釋迦もなく、耶穌もなく、孔子もなく、アリストートルもカントもなく、君父もなく、國風もなく、只自分を標準の智慧競、意地競となる故に、必然の結果として希臘古代のソピスト、支那戰國の諸子百家を想連せしむべき

獨斷説の割合せとなり、めい／＼別々の世界観、人生観、宗教観、倫理観、種々雑多の見解、いはゞ無數の尺度ものさしを持つて来て一枚の着物を仕立ちろさんとするやうなものにて、姑、小姑嫁、針妙、乳母おんぼ、小間使、家内中を擧る衝突、矛盾、軋轢のごつたかへしては、誰れか鳥の雌雄を知るべきや、是非、正邪、美醜悉く紛糾し、一寸先は眞黒暗の中に成人おとなが悉く迷子となつてしまつた形なり。さて此の事實が世界の人心に及ぼせる影響は、當人々々の性質によつて一樣ならずと雖も、押しならして免れがたきは無主義、無理想の弊に墮することなり。凡そ自分尺度の結果は、兎角無定見に流れ易し、而して無定見の必然の結果は、信仰無く、向上心無く、道義無きことなり。思ふに件の時代精神をほのめかせる文學上の作物は十九世紀以來算ふるに違なきほどなれども、最近時の傾向を代表せるものとしては伊のダンヌンチオの作などは其の著きもの、一なるべく、彼のシエンキヰツチの「ツイザット、ドグマ」といふ小説などもそれなり。其の主人公たる男は、無論宗教上の信念なく、道徳上の主義もなく、戀愛の外に殆ど何等の渴望も向上心も無き懷疑家にして、世界に遍からんとする無主義、無理想の時代精神をスラツ氣質中より撮影し來れるものとしては穿細至極せり。や、詳しくいへば、彼の徒らに空中樓臺を築くことに長じて、活動の能力に乏しく、事毎に理窟を附けて自家を回護する癖あり、存外に他人には無慈悲なれども、多感多情は持前にて、何事につけても感受力驚くべく鋭く敏く、感銘は細かく深く、就中自他の心の働きを分析し、解剖し、批判することの精刻なること到底十九世紀後半以前には其の例を見出し

がたしといふものは是れなり。按ふに、今日文藝に従事するものにして、此の性質評を讀みて全然他人のこのやうに思ふことを得るものは餘り澤山はあるまじ。本來此の氣脈は、英に於ては十八世紀の中ごろリチャードソン、スタアンに萌し、佛のルーソーに發展し、獨のゲーテに花を開き、全歐のロマンチストに實を結び、其の後科學の大活動に逢うて標落し、近頃及びて更に第二回の花實を着けんとしつゝありと評して可ならん。北はシエンキヰツチ、南はダンヌンチオと全く風土、習俗、歴史、人情を異にしながら、只此の自意識深刻といふ一氣脈だけは相似たることの著しきを見ても、其の全歐に漲る時代精神たることほぼ察すべきにあらすや。

世間的にいへば、彼のロマンチズムといふ思潮は一大濁流なり。詩歌學藝の美名の下に血の氣多き我儘者どもを驅つて徒らに空想に耽溺せしめ、幾千人の怠惰者の爲に飛んた躰裁よき口實を供したるに過ぎざりし氣味あり。されど其の源は時勢の必要から湧いた清泉なれば、フイヒテ、シェリングなどはいふに及ばず、ヘーゲル、ショーペンハウエルの跡かたづけ連までが孰れも幾らかづ、ロマンチストの傾ありて、今日の研究的態度から見れば彼等も自分尺度の空想家たる氣味あり。彼等の大哲學は一言以て蔽へば大根が主觀的なり、埋立地へ速地形はやがたしてゴシック式の巍々たる大々迦藍を雲間に沖おこらせたやうなもの、輪煥の美人目を駭かし、一代の評判が唾壺からクロコダイルが這ひ出した程に墮しかつたに、一旦地盤がいさりかけて土崩瓦解の場合となつては「主觀的見解」の信用おそろしく下落し、

「事實」の相場が今更のやうに暴騰し、「經驗」「歸納」「客觀」などいふ語が流行り出し、何事も實驗の上、實試の上と、掘越式飯たきの格で、念に念を入れた一粒選り、服紗捌きやら、毒の試験やらの管々しき此の上なし、されどもこの當座は見物皆細かい／＼とて感心せざるはなし。是れ畢竟ロマンチズム流の空想や獨斷が餘り流行りすぎたりし反動にして、即ち主觀的判斷法に對する客觀的判斷法の勝利なりしなり。英語でいへばロマンチック、サブジェクチビチーに對するサイエンチフィック、オブジェクチビチーの勝利なりき。かゝる因縁にて科學的研究はあらゆる方面に波及し、哲學崇拜熱は頗る冷却し、科學てなうては夜も日も明けぬこととなり、觀察、試験、分類、統計、比較研究、史的研究などいふ言葉は通用語のやうになり、一時は歸納推理萬能の勢ひ、科學の力を以てすれば宇宙間の事物何でも分らぬものないかの如き早呑込の噂、受賣姦く、何さま此の割合にて押行くときは、誰れやらがいつたやうに、兩氷洋の氷山を大軍艦の力で熱帶まで引いて來て地球の溫度を平にすることも強ち大氷山の浮いた話でも無からうやうに思はれし頃もありしが、さても知ること彌々多大にして疑ふとも彌々多大となる習ひとして、科學の進歩造詣は(肝腎要の根本問題に關する限りは)或程度までにて止まり、それからは牛の歩み、取わけ活物の人間問題となると、懷疑又懷疑、研究の上にも研究の必要が生じて、複雑煩瑣の取調果しなく、所謂“Scientific spirit takes nothing on trust”て、兎角斷定をしかねるゆゑ、事毎に might be と would be の「しもあらう」／＼しく自烈つた、事情にして變移せずば」とか、「或意味よりい

へば」とか、「一面より觀れば」とか、「或程度まで」とか、「何々は別問題として」とか、何事につけても臆病らしく條件附の判斷七うるさく、衰切らぬこと夥しく、つゞまる所は底無し井戸へ墮込むやうな氣持にて、何一つ心持よく解決の出來た例なし。まして善美藏の政岡では血の氣の多い向う正面連が鶴千代や千松に同感し「かゝる飯はまだか」と總立になりしも道理あることなり。總じて科學者氣質は頭腦の冷靜を重んじ、感情を貶しめ、斷信し斷行することを嫌ふゆゑに、宗教、詩歌、藝術若しくは現世的事業とは、まさか犬猫のやうでないまでも風する馬牛の趣あり。そこで以て詩と學問とは次第に中がわるくなりはじめたり。昔は歴史といへば何處の國のも半分は小説のやうなものなりしに、十九世紀以來のは、先づ印度護謨を噛むやうなのを本場物とするならばし、又哲學書とても大昔には莊子やブレトリーのやうな洒落れたのもあり、天文學や植物學を韻文で書綴つた時代もありしを、今は哲學者科學者の文章といへば的の字づくめの乾燥無味が學者らしいと相場定り、「二二が四」といつても濟みさらなところを、氣取つた手合は「二といふ數を以て之れを其の同敷に乗すとせよ、吾人の經驗せる限りにていへば、概ね該原數の二倍たることを常とするもの、如し……」是れ豈腦充血連中の我慢し得る所ならんや。

ジョン、モレーの說によれば、彼のルーソーの獨斷論が當代に歡迎せられしも、其の一因はモンテスキュー一派の史的研究が餘りに煩瑣に流れたりし反動なりとか。蓋しルーソーによりて開かれし空想

派の泉流がロマンチズムに至りて汎濫の極に達し、こゝに再び科學派の捲土重來を招き、科學萬能が再度頓挫するに及びて新ロマンチズムまた起り、今日現に見るが如く、新舊の思脈亂麻のやうに入亂たるなりとも見るべきか。

扱又之れと同時に新聞雜誌的科學思想の普及は、一知半解者流の濫用と相俟つて、大に科學の信用を損じ、「淺薄なる科學」などと、根つから科學に縁のない我々にまで大きにチャチがらるゝとなりたり。それも本元さへ隆々の盛運ならば、何のかけかまひなきことながら、實際大本營は當分冬籠の爲躰、肝腎の根本問題は扱も其の後ちつともそつとも進歩せぬ地だらう。天地の本躰、本源は扱おき、吾々人間の真相、歸趨からが不分明なること十八世紀ごろとさして異つたこともなし。嗚呼ニュートン、ダルトン以來科學上進歩はあれども革命はなし、科學は今も尙ほ過去の推測者、現在の穿鑿者たるにとゞまれり、到底將來を豫言するの資格はないものだわえといふ半端を打込むもの漸く多く、科學萬能の褒言葉いつの間にか歇み、科學崇拜熱めつかりと冷却し、尠くとも詩人肌の多血質連中に對しては科學は其の信用を失ふことゝなつたり。之れを世に「科學及び實驗哲學の破産」と稱す。昨今の形勢も尙此體なり。

彼のロマンチズムの汎濫は、世間的に見れば、新代の個人が浮世に處し惱みし苦悶煩悶の結果とも見るべかりしが、今や科學の破産と共に第二の失望煩悶がはじまりたり。一方に於ては物質的文明の

進歩に目を眩まして黄金時代がつい鼻の先へ近づいたやうに思ひ、精神界の事も科學如來の御營願て萬遍なく救はるゝことゝ望を屬せし度合の餘りに甚しかりしだけに、失望も憤激も煩悶も前代の幾層倍に烈しく、氣早の若手は、世界は全く機械的なもの、人間の事は言はゞ夢の戯れ、何でも只利口で押し強い奴が勝、宗旨も道德もあつた者かえと放埒を意見する實の親に食つてかゝつても、和解へる叔父貴と兄貴からが善惡論で目に角立て争みあふといふ思想の紛糾、大亂脈、何が何やらさつぱり分らず。之れを要するに無理想、無主義の濁浪が天に漲る現代は、進退是れ谷まり、天を仰いだところが、神も佛も本躰が分らぬので頼みにならず、只力綱は自分の智慧ばかりとなつては、度胸のあるなしが人間品定め、唯一の目安となり「意志崇拜」の世の中となること自然の數なり。夫れ信仰もなく、主義もなく、理想もなく、何等向上の念もなく、只自分の利益を專一の時代には、生中の人情はどうやら無用の長物に過ぎざるが如くなれども、そこが人間の悲しさには、此の人情といふものを流石根こそぎにも棄てかねて、利己と愛他の中有に迷ふ氣の弱い我利々々亡者も夥し。若し此の一代の心的傾向に何等かのイズムありとすれば、假に之を現世主義と自家満足主義との二大イズムに歸收すべし。濃淡の度、高卑の質にこそ驚くべき別はあれ、現代人心の向ふところ、先づ此の二者を出てずとも見るべし。蓋し我意強くして他人を思ひやる情薄ければ、眼中に宗教なく道德なき論理上の結果として、人間つまり五十年と高をくゝり、我欲を遂ぐるより外に満足はなしと合點し、哲學者の講義を俟たずとも快樂主義、本

能満足説に立脚する等。扱又靈魂の不滅を信ぜず、世界の在存をも信ぜざる自然の結論が最も高くして娑婆即淨土説となり、それから墮落した「今日主義」To-day-ismといふ賈ひ物の流行一世を風靡せんとする勢ひあり。現世安樂が一點張の望み、功名が無上の手段、我が園遊會の立食は今日主義者生存競争のシムボリズムなり。

かういふ時勢となつては意志の薄弱な連中は一段と可憫なり。自身定見なきゆゑ、君子肌なれば、それも一理これも一理と退讓づくめて埒あかず、つい一生を無能に終り、小人肌は時勢の然らしむる所生中智慧だけがよく働くゆゑ、左右前後が二三間宛はよく見え、それが爲足がすくみ、手がすくみ、只管世間が怖ろしく、人の鼻息が怖く、何事も天真爛漫にはえせず、阿附し、而従し、矯飾し、偽善し、宿無し犬が家々の掃溜を探りあるくやうに人目をぬすみて窃々と快樂主義を行ひ、自家満足主義を行ふ。按ふに輿論を奴隸的に怖るゝことは慥かに現代の通弊にして彼のイブセンが諸作に亘つて痛罵せる所のものは是れ也。然らざれば、徒らに疑惑し、危惧し、苦悶し、怨嗟し、自暴を起して墮落し、果は氣が狂うて自殺する者もあり。若しくは筆舌に無責任の破壞論を唱へ、他人をして自家が實行し得ざる所を實行せしめんと願ふ者もあり。之れを要するに、小膽者は偽飾し、剛膽者は横暴をも敢てす。輿情の傾向が著しく爲我的なること明かなり。此の間の消息を傳ふる作家としてイブセンは實に其の一番鶏なるべく、ゴルキーの如きは夜明鴉に比すべし。

爲我的といふこと必ずしも悪い意味にあらず。自家満足主義もまた然り。甚だ高上な意味にも解するを得。例へば、彼のグリーン一派、バツルゼン一派の倫理説の如きを此の時代精神の醇化されたるものと見る場合の如きは是れなり。よしさなくとも個人主義全盛の世に人心が私欲一點張といふ意味の爲我主義に流るゝとも、それは昔から有中の事にして不思議がるに及ばず、随つて取越苦勞をなし、狼狽へ騒ぐにも及ばぬことながら、只こゝに注意すべきは現代に限り、利己主義といふ意味の爲我主義にも「自是的」といふ特徴の伴ふことなり。昔もアリスチッポスや楊朱やマンドギルやホップスやあり、これらは或は利己主義に立脚し、或は利己主義を是認し、そこに倫理の地盤を据ゑ、表立つて利己主義を主張したりし連中にて、かゝる例は決して今日にはじまつたことにはあらねど、それらと目下上中下に瀾漫する粗造品並の「自是的利己主義」とは、唱ふる連中の本意、目的、適用の範圍、實際の作用の上に際立つた相違あり。今は中小學の童兒までが爲我的功利主義の信者にして、學問經驗の生中な手合は底を拂つて楊朱、マンドギルの亞流たらずんば、ホップス、アリスチッポスを生嚙にした連中らしいはまだなこと、ニーチェが新しげに説き立てし倫理説も彼等に取りてはとつくの昔に實踐したることに外ならざるの概あり。彼の佛の澆季派一派の言行に徴し、若しくは近き三四十年間の歐洲大陸文學が明示し又は暗示する所によつてかゝる風潮の如何に現代に盛なるかを察すべし。「斬取強盜は武士の習ひ」とは階級制度と武家的功利主義とに伴へる自是的利己の一例なりしが、近來流行の姦逆是認、自

墮落是認などに至つては、非階級的、非功利主義的なるだけに、其の影響に於て大ぶ關心すべきものあり。要するに過去の利己主義は大抵半無意識にして半自非的なりしに、現代の傾向は悉く意識的にして且つ多少自是的なり。自ら責むるの心無きゆる悔悟遷善の機縁乏しく、自墮落募り易し。昔は「義務だぞ」と言はるれば奮然として起つたものなりしが、今日は其の反対は「義務だ」といはるれば意志が麻痺るなり。是れ畢竟は教育普及の結果、平等自覺の結果として、一度は社會が經過せざるべからざる倫理的状態なるべく、即ち平等主義に伴ふ個々人が自尊心の然らしむる所と、例の科學者風に沈着拂つてしまへばそれまでの事なれど、かくの如き變現象は、尠くとも天保生れの頭腦をして國家の滅亡を杞憂せしめて餘りあるほどの倫理上のがんどう返しなり。何故といふに、純然たる自分勝手一方を最上善と立つるに及んで、倫理説は全く其の開闢以來の標準を逆せにしたりといふべからずんば、尠くとも二三千年以來の臺座を顛覆したものと云ふべければなり。ニーチエが見事新倫理見を創始したりと信じ、第二の基督を以て自任せしこと謂れありといふべし。

語は新時代精神の引札にして、舊時代精神の化石なり。十九世紀に入りては、*self-ness*、*self-life* 及び *self-hood* に關する語の殖ゑたること驚くべし。大陸の事は知らず、英語の中にて大陸文學の翻譯、新倫理學說其の他の必要上より十九世紀も其の後半中に造られたのではなからかと思はるゝ語勢からず。一寸した見本が、例の倫理學上の用語たる *self-realization*、*self-satisfaction* 乃至 *self-*

fulfilment、*self-centrism*、その他 *ego-theism*、*self-worship*、*self-idolatry*、*egomania*、*egotism* 等、又熟し用ひたる例のうちには *cult of self*、*aggressive egotism*、*egotism incarnate*、*delirious individualism*、*individualism gone mad*、*each-for-himself-ness*、*in-and-for-one-self-ness* 等。

明治の社會にも大ぶ用ありげな語あり、以て時代精神の趨向を窺ふべく、兼ねて現代の變調は無我、献身、克己、遜讓を絶對の理想としたりし東西幾千年來の舊道徳に對する反動の結果たること學者先生の取調を俟たずとも明かなるにあらずや。

此の爲我主義大盛の陰影は特り西洋諸文明國の小説中に黒々と映じ居るのみならず、我が明治作家が作中の人物も多少同血脈の人種たることとゞひ明かになり來れり。歐洲最近名家の作中の男性人物の著しき特質は、いづれも神經過敏にして痛ましきほどに自意識的にして、喜ぶにつけ、悲しむにつけ、只の刹那も忘我することが出來ず、隨つて深刻に爲我的にして我が最愛の情婦とすらも曾て同化する能はざるものさへあり。或者は餘りに聰慧にして想像臆測に長じ、直覺に拙く、決斷に鈍く、何事につけても兎角本能的に行動するとを難ぜんとす。女性と教育無き下等社會だけは尙ほ流石に然らず。彼のツルゲネフ、ゴルキが作中などに、頗る克く此の間の消息を傳へたるものあり。されど其の實此の傾向のひとりスラヴ民族中のみ存在するものにあらずる證據は、那、佛、獨、伊、いづこの近代小説を見るも多少類似の人物の寫されたるによりて會得すべき也。イブセン、ゾラ、モーパッサ

サンなどの作中について見るも、眞に他人の爲に忘我し、献身し得る人物は大抵女性にして、男は品性ハイソサリヤクの高下に拘らず、又意志の強弱に拘らず、十中九まで瞬時も忘我する能はざる人物なり。智餘りあつて意志足らざると同時に「自我」といふ念の餘りに強烈なるなり。按ふに是れ將たロマンチズム以來の暗流にして「ハムレットはやがて日耳曼なり」と稱せられたる頃よりのことにして、露西亞などへも大ぶ早くより流れ込みしものらしく、たしかツルゲチフの所論の中にもハムレットとドンキホーテを比較して後者の勇往直進を稱歎したるものあり。多智に伴ふ懷疑、不決斷、多想像に伴ふ空想、臆病、深刻なる自意識に伴ふ深刻なる利己主義、此の血脉の因つて來る所遠くして且つ深し。

かゝる不健全なる傾向のちひ／＼甚しくなり來れる時に際し、他方にまた之れをして益々激烈ならしむるに與つて力あるべき一事實あり。他なし、人工の進歩に伴ふ不健全なる傾向是れなり。此の事の詳細は、到底今こゝに述べ盡すべくもあらねど、只一言すれば、文明の進歩によつて萬事萬端が餘り便宜になり過ぎ、それがため、便安逸樂がふんだんになり、身をも心をも苦に慣らすといふことなり、先づ人間の身體からがものづから孱弱に育つといふことなり。

“Thus first necessity invented stools,

Convenience next suggested elbow-chair,

And luxury the accomplished sofa last.”

奢侈便安が慣れつことなつたる文明社會の通弊は懦弱懶惰の生活なり。現代の人間は自意識の強き

ため感覺さらぬだに鋭敏なるに、早くより便安逸樂に慣るゝゆゑに、聊かの苦をも忍ぶ能はず、又自由時代の弊として放縱の癖が沁込み、慾を節するの勇に乏し。現代の理想は Gastronomy (食道樂) と Hygiene (輕文學) なりと或露西亞小説の翻譯中に見えたるは克く此の惰風を喝破せるものなり。夫れ精神上の悅樂は再三にして廢くとなければ、肉體上の快樂は屢々すれば興さむるを常とす。神經過敏の癖として、一寸した不快感にも飛びあがるほどに感ずるが常なれど、快感に對しては、視聽味嗅觸ともあそろしく遲鈍になり、到底尋常の物品や尋常の手段方法では満足を感じがたくなる奢侈の増長、衣食住とも、人工全盛時代の然らしむる所として、工夫に工夫を重ねて天然を磨損し、不健全を募らすに忙しく、飲食から、服飾から、娯樂、遊藝、何でも皆五感を快くくすぐるが目的で出來てゐる故神經片時も休まる間なし。取りわけ上中流の人間は、一世を擧つて珍物を漁る有財餓鬼、榮耀に餅の皮なぞは今は權太あたりですら通用のいかゞはしき俚諺なり。香料、嗜好品、リフレッシュメント、興奮劑、強壯劑、曰はく何、曰はく何、名は藥、實は毒藥の發明果を知らねば、何の事はなし、滅亡間際の羅馬貴族の贅澤が平等時代の恩澤にて最下級にも波及する爲弊、就中中央首都に在つては理髮師のアップレンチスからが小ベトロニウス其人なり、電車八通の今日は、口給十五錢の六尺男にして其の足一代三町とは都の土を踏ましても濟む大便利、運動不足して不消化こたれわらく、腸胃カタル、神經衰弱、いづれを見ても文明がる手合に青瓢箪のつらがまへならぬはなし。かて、加へていづこも同じ生存競争の激甚、生活難に驅立ら

れ、ものが健康や才分には斟酌なく無理詰込の速學問、只我れ先と出世成功を急ぐゆゑ、さらぬだに神經は過勞すべき筈なるに、鐵と蒸氣と電氣との効力で、急に五大洲が縮小し、西洋と東洋とは壁一重の隣づからなれば、パリ、モスクワの爆裂彈の碎片がツイ支那、日本へ飛んで來まい者でもない世界の狭さ騒がしさ、目まぐるしさと氣ぜわしさとして深刻な自意識の苦みは彌々以て堪へがたく、或は毒と知りながらも種々の麻醉劑を濫用し、酒と阿片と女色との爲に慢性自殺を行ふ者の増加するも道理、さすがに此の三つの魔藥だけは一時忘我さする効能あればなり。まして彼の「戀」といふ魔藥の力は餘程甚しき爲我家をも恍惚として忘我せしめ、時として向上の志を發せしめ、死を怖るゝの念をさへ全く解脱せしむることあり。宗教の威信衰へて昔の神様は惹けてしまはれた現代に、酒ならずして、阿片ならずして、此の靈驗を有するもの、此の外には亦有るべしとも思はれず。若し假に有りとすれば、所謂大文學、大藝術なるべけれど、下戸にはアルコールの向かぬが如く、文學、藝術の功德にはあつから限界あり、逆も彼の「戀愛」の如く普遍なること能はざる勿論なれば、今日戀愛の神聖が唱へらるゝは畢竟するに時勢の必然なり。さればまた今の青年は、失戀といふことをさながら人生の身代限なるかの如く感じ、氣短かにも自暴自棄して無慚の結果を醸すこと多し。之れを要するに、西洋諸國の一側面を「文明の食傷」と診斷するは、多少道理あることなり。尠くとも「自意識病」の爲に神經の甚しく衰弱したる病人ならぬ病人が年々歳々に増加する傾きあることは事實らしく、彼等は、或は父母、祖父母が

蕩逸懦弱なる生活の業因により、或は自分自身の不養生によつて、いつしか身心を病的に持崩し、ヒステリーのとなり、瘋癲的となり、白痴的となり、甚しきに至つては、荒淫者の末路の如く、飲食も舌に美からず、聲色も視聽に快からず、浮世の事一切を面白くなく、つまらなく、無意義、無趣味に感じながら尙命のみは何となく惜しくといふよりは、死といふことを只何故ともなく怖ろしく感じて、人百倍に苦むさま眞に惘然の至りなり。ゾラが「人生の悦樂」の主人公、イブセンが「亡靈」の主人公などは死を怖るゝ人物の好例なるべし。尤も特に取出していふまでもなく、凡そ羅甸民族を代表する最近小説家の作中には此の類の人物殊に多し。又彼の澆季派の詩人中などには事實上の的例も尠からざるもの、如し。よしや幸にかゝる甚しさには至らざるまでも、苟も現代の青年、就中文藝に従事する連中にし多少此の種の苦痛を経験せざる者はなかるべく、時には経験せずとも経験したらしきものせねば幅が利かぬといふほどなり。中には極端より極端に走つて突然宗教信者となれるもあり。宗教家はかかる場合を發見する毎に狂喜して宗教復活の前兆也などといへど、ロマンチスト等の發心はともすれば感情上の道樂、徒の *sentimental selfishness* (崇嚴なる私慾) に過ぎぬこと多ければ、餘り多くを望むは失望の基なるべし。勢ひ此の如くなれば、それやこれやを思ひあはせて文明諸國の前途を悲觀し、或は羅甸民族の滅亡を豫言し、或は「澆季」「墮落」「退化」など、種々不祥なる名稱を並べて「文明」を呪咀する人々の日々に増加する、これもまた一理あることなり。

さて之れを一概に大陸一つあなたの精神上のベストと見流し、何の豫防策も講ぜざること可かるべきか。又は風聲鶴涙に驚き、利を享樂すること未だ半ならざるに、早く既に文明の流弊に戦き、あわて、呪咀黨に雷同すべきか。是れ緊要なる一つの問題なり。

ルネッサンスの昔、彼の大思潮が歐羅巴一面に汎濫したりし時、英吉利は島國なれば其の利に浴することとせずと大陸諸國に後れたりし代りに、人によつては岡目八目を利用し、前車の覆轍に鑑み、幾分の弊を薄うするを得たりしものあり。我が東洋の新參國しんさんこくうましく此の前蹤に倣ふことを得るやいか。是れが第二の疑問なり。(三十八年九月)

文藝瑣談 終

明治四十年五月二十日印刷
 明治四十年五月二十四日發行

文藝瑣談
 實價金壹圓

著者

坪内雄



發行者

和田静子

東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者

佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所

春陽堂

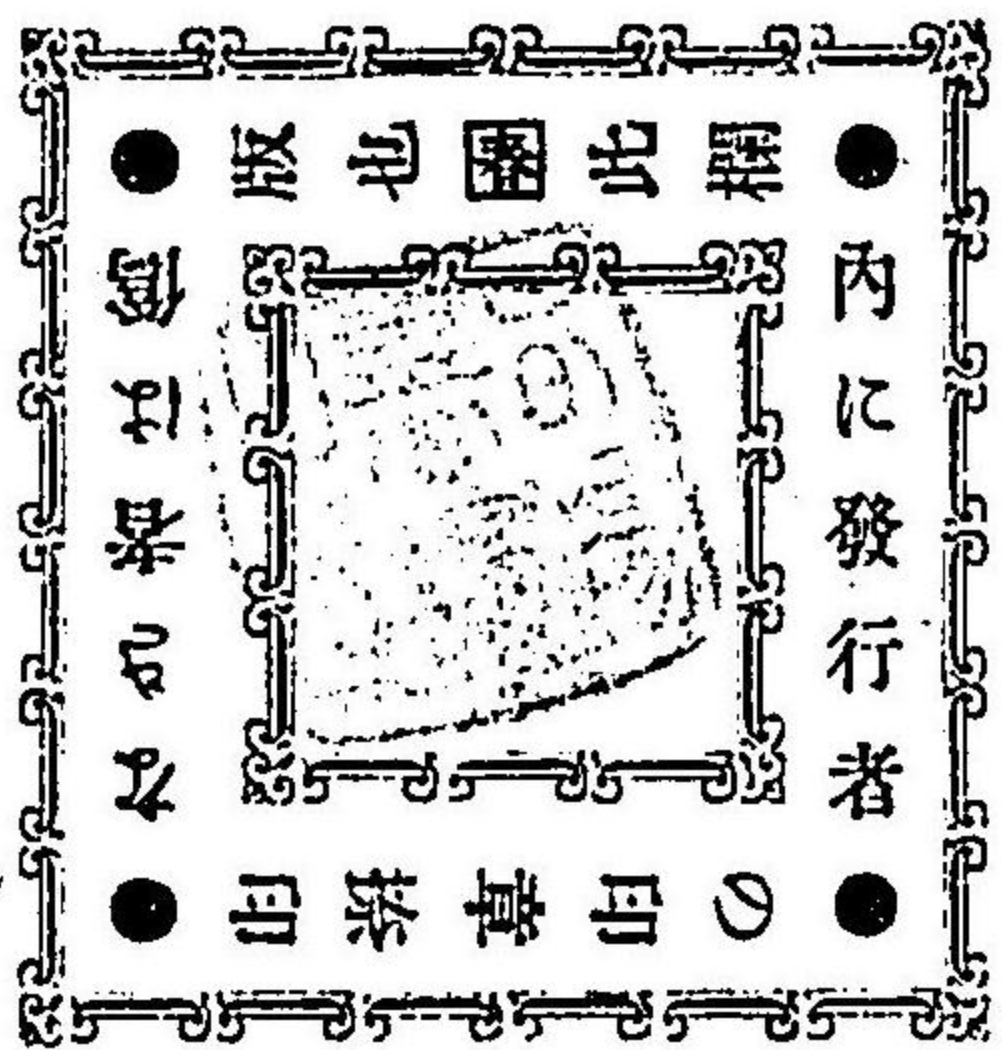
東京市日本橋區通四丁目角

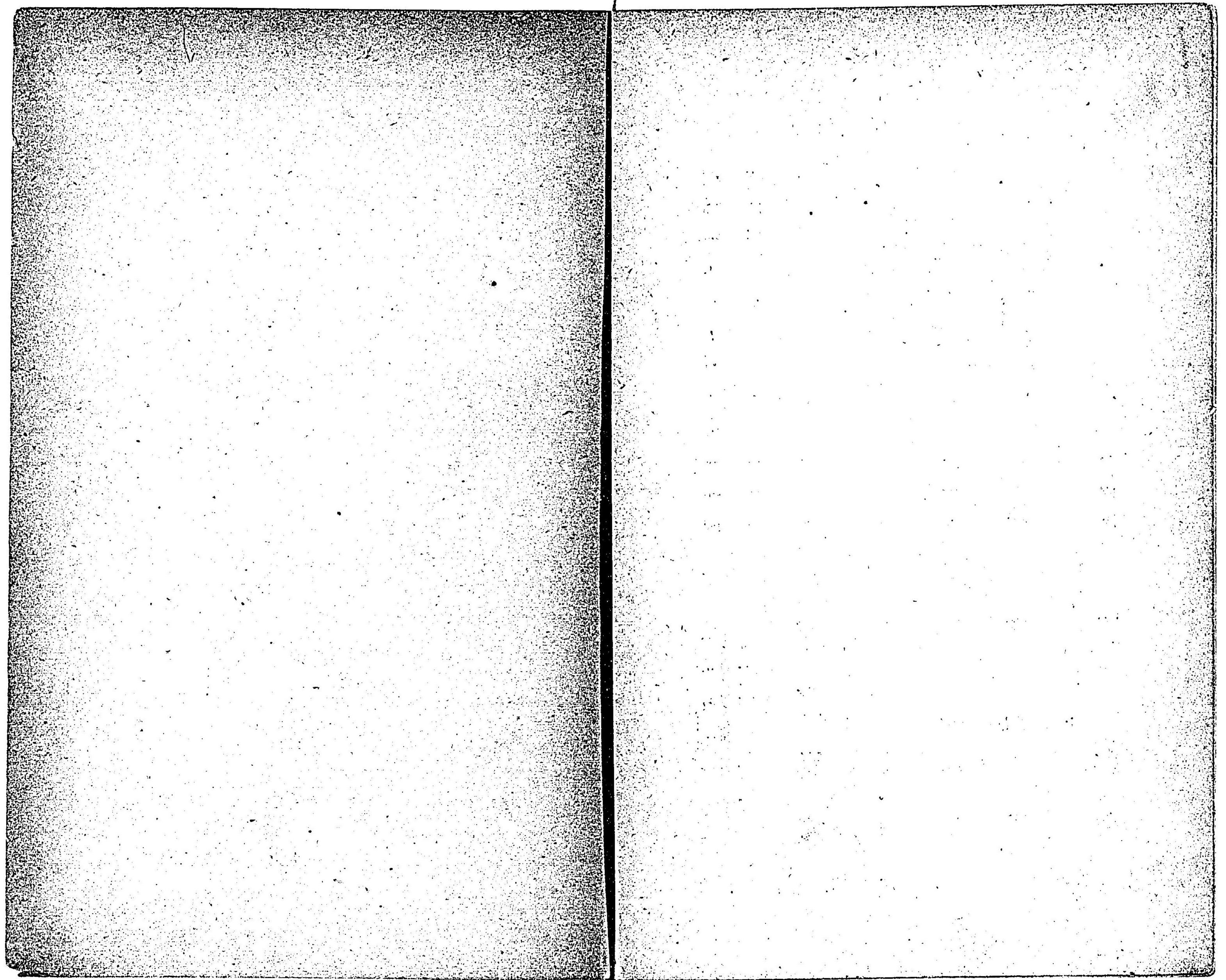
電話本局五拾一番

印刷所

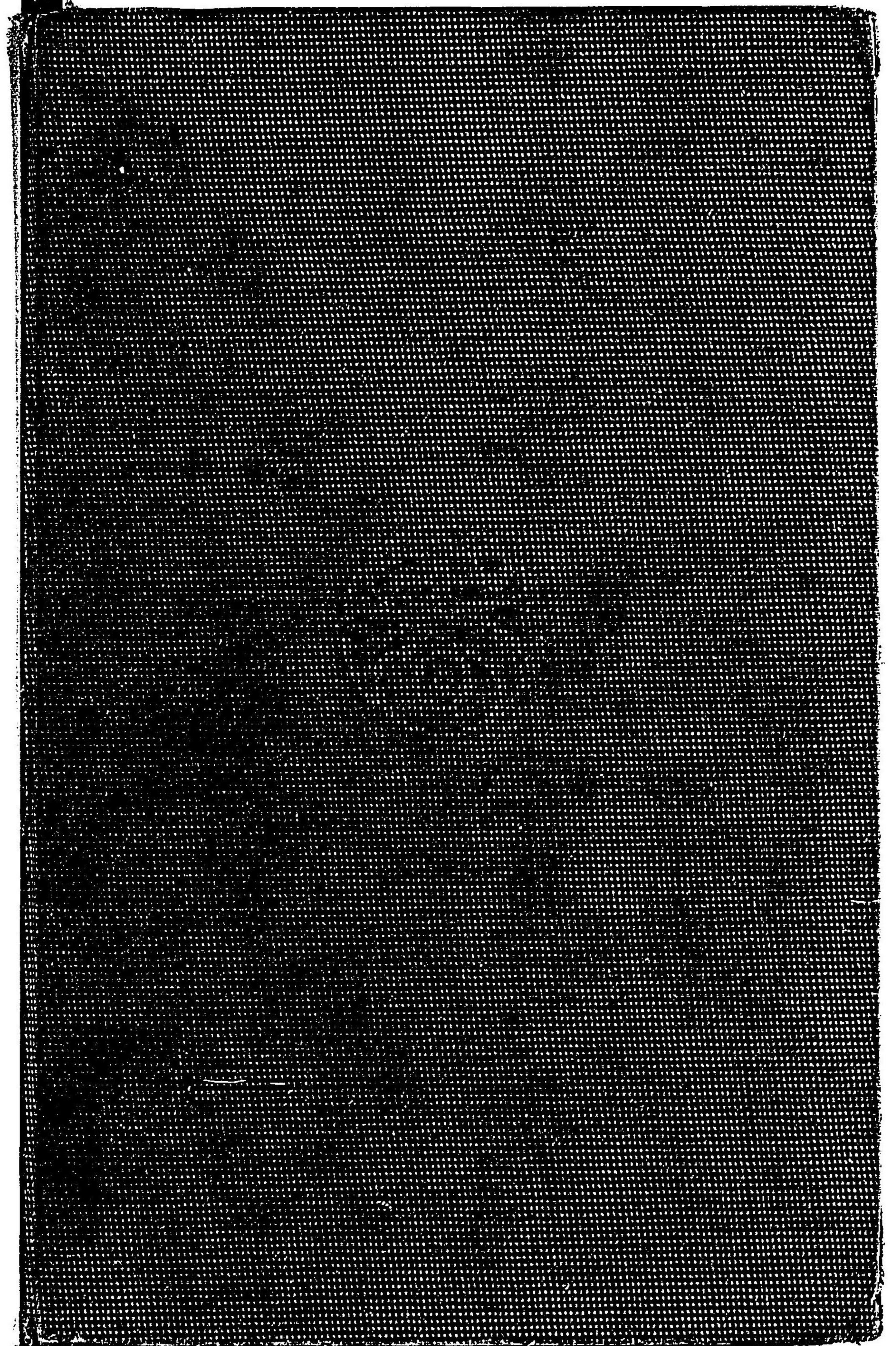
株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地





74
398



74

398

084828-000-4

74-398

文芸瑣談

坪内 逍遙/著

M40

DBA-0173



